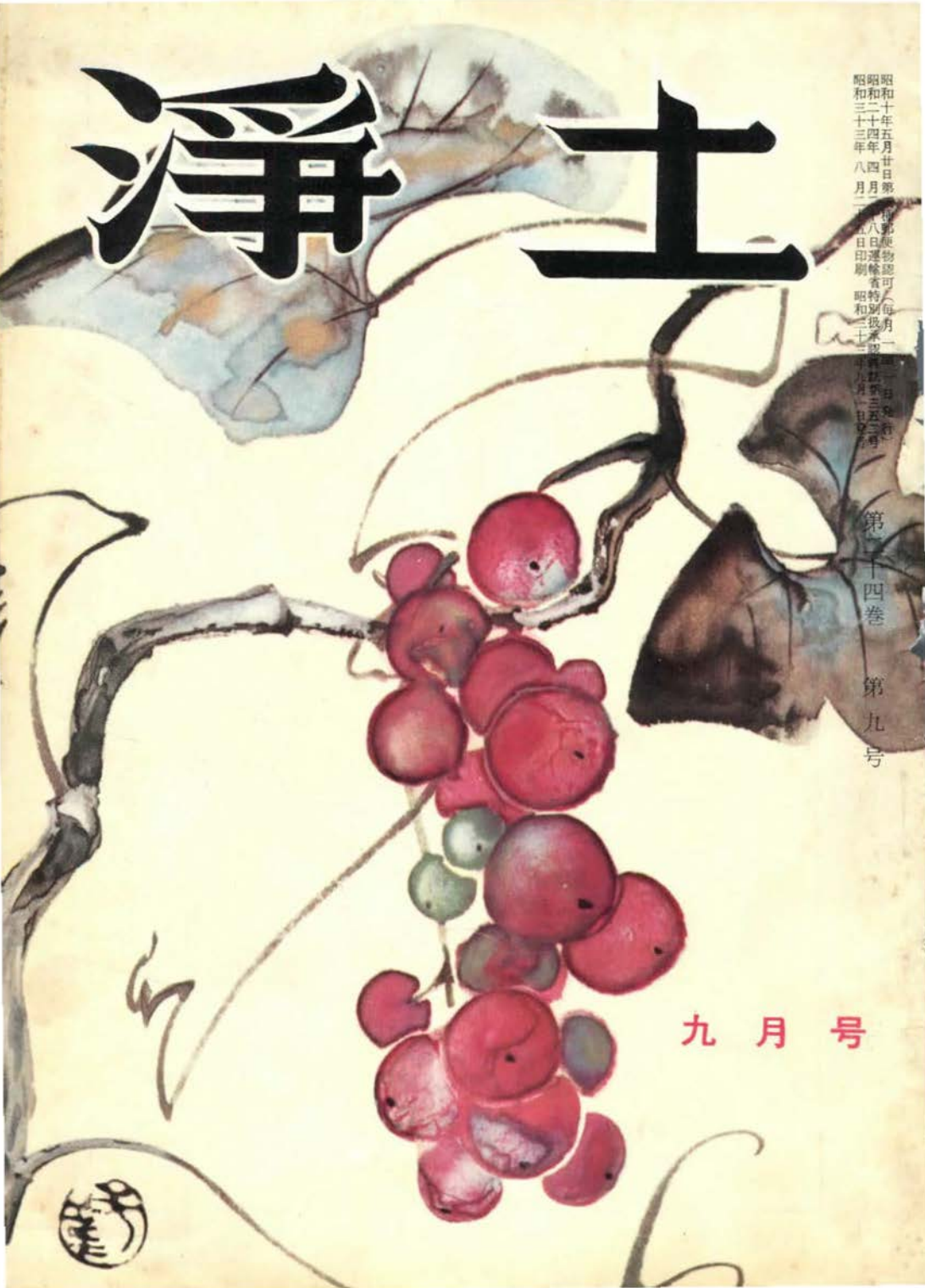


浄土



昭和十年五月廿日第
昭和二十三年八月
昭和三十四年四月
昭和三十五年四月
昭和三十六年四月
昭和三十七年四月
昭和三十八年四月
昭和三十九年四月
昭和四十年四月
昭和四十一年四月
昭和四十二年四月
昭和四十三年四月
昭和四十四年四月
昭和四十五年四月
昭和四十六年四月
昭和四十七年四月
昭和四十八年四月
昭和四十九年四月
昭和五十年四月
昭和五十一年四月
昭和五十二年四月
昭和五十三年四月
昭和五十四年四月
昭和五十五年四月
昭和五十六年四月
昭和五十七年四月
昭和五十八年四月
昭和五十九年四月
昭和六十年四月
昭和六十一年四月
昭和六十二年四月
昭和六十三年四月
昭和六十四年四月
昭和六十五年四月
昭和六十六年四月
昭和六十七年四月
昭和六十八年四月
昭和六十九年四月
昭和七十年四月
昭和七十一年四月
昭和七十二年四月
昭和七十三年四月
昭和七十四年四月
昭和七十五年四月
昭和七十六年四月
昭和七十七年四月
昭和七十八年四月
昭和七十九年四月
昭和八十年四月
昭和八十一年四月
昭和八十二年四月
昭和八十三年四月
昭和八十四年四月
昭和八十五年四月
昭和八十六年四月
昭和八十七年四月
昭和八十八年四月
昭和八十九年四月
昭和九十年四月
昭和九十一年四月
昭和九十二年四月
昭和九十三年四月
昭和九十四年四月
昭和九十五年四月
昭和九十六年四月
昭和九十七年四月
昭和九十八年四月
昭和九十九年四月
昭和一百零年四月

第十四卷

第九号

九月号



浄土の会員を一人でも多く

◇どなたでも会員になれます。

◇会費は年額四八〇円です。

◇会員には毎月浄土を配布します。

◇この会は皆様の会ですからその発展の為に

お一人でも多くの会員をつくって、正しい

信仰運動をひろめましょう。

お知合の方にぜひおすすめ下さい。

◇お申込は振替（東京八二一八七番）を御利

用下さい。

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

浄土九月号 目次

表紙・扉絵 結城天童

カット 加藤金一・原比呂美

彼岸に念う……………藤井実応……………(6)

おがむ心……………村山善太郎……………(2)

庶民と念仏……………一瀬直行……………(12)

金光上人墓地参拝記……………間山泰宣……………(24)

実話仏に笑われた母……………編集部……………(34)

中国綺談……………牧尾良海……………(16)

小説素はだの人……………鶴田湛泉……………(28)

浄土歌壇……………岩野喜久代……………(40)

巻塵閑話鼻持のこと……………伊藤辰造……………(11)

法然上人をめぐる人々(一)……………井川定慶……………(22)

扉の御法語……………(14) お願 い……………(33)

孔雀の糞……………(18) 会員紹介……………(41)

法然上人の言葉(四)……………増谷文雄……………(36)

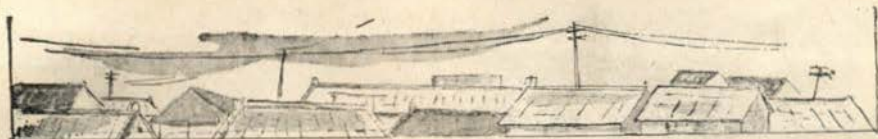
浄土

九月号

念仏の時惡業のおもはるる事は一切の凡夫のくせ也。さりながらも往生の心ざしありて念仏せば、ゆめゆめさはりとはなるべからず。たとへば親子の約束をなす人いささかそむく心あれども、さきの約束変改する程の心なければ、おなじ親子なるがごとし。

法然上人御法語





おがむ心

村山善太郎

去る、五月の下旬に、御得意先招待のために佐渡へ渡った。ひどい荒天でさすが八百トンの『ゆめぢ丸』も山のような大浪にもまれて船中生きた心地もなかったが、土砂降りの両津港へ着いて、日本海の荒海でとれた鯛の刺身で昼食を済ませて居る内に雨も止み、忘れたような好天氣に其の後のコースは至って順調で、其の夜は相川泊りで私達はM旅館へ宿泊した。

翌朝、同宿のA君に当家の御仏壇が大変美事だから是非拝観させて貰つてはという話を聞かされて、女主人に旨を伝えると是非御いで下さいという返事に、私達数名は仏間に案内された。

越後は、真宗ゆかりの地だけにさすがに立派な御仏壇で、本願寺から拝領という阿弥陀仏も名作であり、巾二間以上もあるかと思われる内部に塵一つ止めず、あるじの篤信の程も偲ばれて、奥床しく心から拝礼して、貴重な旅の思い出を残したことであった。

聞けば当家は佐渡の金山と共に栄えた旧家で、金山が下火になったために広大な邸宅を旅館に改造、自から旅館の女あるじとして祖先の位牌を護って居るのだそう、客の扱いにも素人くさい中に品格があり、一家揃って家業の中に仏道がこもっていて、女中さんまで遊山地らしくない静かなこなしでまことに良い印象



を受けた。

私はこの十数年、御仏壇だけは必ず自分の手で毎日清掃する事になっている。朝のすがすがしい気分分て御位牌を拭い、御本尊様のほこりを払うのはまことに気持ちの良いものだ。

家内は到来の御菓子や果物を、まず御仏前に上げてから頂くことにしている。きれいになった御仏前に、御燈明を上げて御線香を立てて拝む。この日課は一日も欠かした事がない。

当日の過去帳の御先祖を拜む。この場合、御戒名というものはまことにむづかしくて親しみにくいものだ。私は自分の娘の御戒名から必ず俗名をそのまま御戒名に入れて貰うことにしている。

お正月の元旦には、年始の前にまず菩提寺に墓参をする事になっている。若水を御石塔に上げて御先祖から、別家の御墓へ次々と御線香を上げて行く。この事は一年も欠かした事がない。

信仰とは決してむづかしい事ではないと思う。ただおがむ事。そして欠かさぬ事。これだけを信念として居る。

法隆寺へ御詣りに行く。昔はひっそりとした金堂の

中に香煙がただよっていた。年老いた案内者に導かれて、先づ飛鳥時代に止利仏師の刻まれたという釈迦如来の像に合掌し、説明を聞きながら、百済観音を見上げる気分は何とも言えなかった。今では観光バスが一杯機嫌の人々をぞろぞろ運んで来る、拝んでいる人は一人もいない。中にはバスガールの説明のあげ足を取ってドッと笑う人。仏像は火災以来宝物殿の中で單なる美術品としての扱いを受けている。百済観音も上野の博物館にある模造品の様な感じである。見上げるのに適当なスペースが考えられていないからだ。

白々とした道に、土塀が続いて夢殿のいらかが小さく見えた。あの静かなあたりには御土産物屋の屋台がひしめいて客を呼んでいる。定めし聖徳太子も五千円札の中で苦笑していられることだろう。

金閣寺・銀閣寺ではスピーカーが余り良くない音で宝物の説明をしているが、誰も聞いている者もない。この頃は焼けたお寺が不思議と繁昌するので、そろそろうちも焼けないかなどと不心得な望みを抱く坊さんがあるとかないとか、マスコミもここ迄来ると罪が深い。

日本のお寺は、法事ばかりして外に能が無い様に



うのが目下のはやりだが、法要の行われ方も一考の余地がある。

遠慮なく云えば、大抵の法要では住職は読経の外には余り参列者の前へ現れない。待ち合せの時間こそ、衆生教化には良いチャンスなのだが。どちらかと云えば、法要のあとの御法話よりこの方がきき目があるのだが。

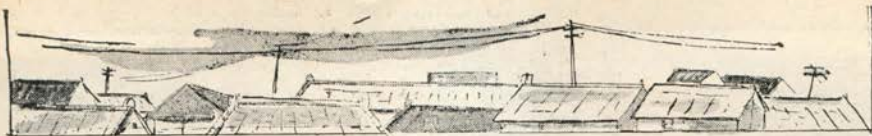
亡き下村海南先生でさへ『お経の最中は外の事を考えるのによろしい』と云われたくらい、お経の文句が分りにくいのが最大欠点だ。支那語で書いたものを、文字の通り棒読みして分ったらおなぐさみだ。これには二つ理由がある、分らない方が有難いという神秘主義・棒読みの方が早くて良いという便利主義・転読とか云って表紙から裏表紙までバラバラ流すと云う超スピード型もある。

私は自分のお寺専用に阿弥陀経から四誓の偈に至るまで、長いお経ほど読み易い和文に直した勤行式を作って、法要其の他に使って頂いている。参列者が大喜びで唱和して呉れるのは勿論だが、御住職も最近では他の御法要にも進んで使って下さるので思いもかけぬ人助けをしているかも知れない。

もう一つ云わして貰えば、私は現在の御通夜というものも気に入らない。日本人は一体にサービス過剰で、旅館へ行くとすぐおしぼりが出て、浴衣まで着換えさせて呉れるのは日本だけだそうだが、御通夜も其の通りで、御焼香をしていると『どうぞおちらでおい』という二階へ押上げられる。何がお一つかという、夕飯が済んで来たのに『御供養ですから』と酒を出され『何か一つおつまみなさって』と料理を出され、料理屋の女中さんは忙しそうに料理や酒の補充をする。酒を飲めば、余り思い出話などは出ない。ホラも吹けばY談も出る。『私は陽気な事が好きでしたから』などとうまい事をいうが、飲酒戒と妄語戒と邪淫戒のカクテルでは亡者も浮ばれまい。私は、或る御通夜で、御茶と御菓子だけでシンミリ話し合うという例に出あったが、非常に良かったと思う。ただそれだけでは、費用を惜んだ様に見えるので別の機会に、軽い折詰に一合びんをつけて『御邪魔ですが』と持たして上げたこれらも評判が良かった。

酒を出すのは初七日ぐらいに止めたい。

大きな花輪を関係の無い人の前まで、一町も二町も並べる習慣も何とかならないのか。



近頃は選挙運動に大変効果があるそうで、その先生方がバカでかいのを持ち込むので、一般も段々大きくなって来ている。私の言うのは、世の中が段々形式に流れて本当の気持が失われているのを何とかしたいと云うことで、これは御葬いばかりしている、お寺の責任ではなく在家の人にも相当の責任があるということだ。

そうして色々なサービスのために、御施主さんの家族がしみじみと合掌するひまを犠牲にしない様に心づかいをして頂きたいという私の老婆心である。

私は今日、印度舞踊に一生を捧げている榊原帰逸氏の舞踊学校に招かれて、応接間でよもやまの話をしている内に、小乗仏教と云われながらも仏の前にぬかづく事を知っている、南方民族の事を思い、八万四千の法門より、まず拝む事が仏教では一番大事な事ではあるまいか『生を明め死を明むるが仏家一大事の因縁なり』という修証義の一句を思い浮べ、同時に理窟は、学者にまかせて、ただ一向に念仏することが、仏教ではあるまいかと思ったことであつた。

（神田寺信徒總代・昭光院檀家總代）
有限会社大嶋屋社長

生きていること

東に病気のこどもあれば
行つて看病してやり
西につかれた母あれば
行つてその桶の束を負い
南に死にそうな人あれば
行つてこわがらなくていいといひ
北にけんかやしょうがあれば
つまらないからやめろといひ
ひでりのときはなみだをながし
さむさのときはおろおろあるき
みんなにでくのぼうとよばれ
ほめられもせず
くにもされず
そういうもの
わたしはなりたい

—— 宮沢賢治詩集より ——



彼岸に念う

——特に忍辱波羅密について——

藤井実応

春夏秋冬と四季が順にめぐってきて、氣候の変化を見ることは、わが国風土の大にめぐまれたところだと申します

が、殊に海外に暮したことの人は、この事を一層はつきりと感ずるということです。暑い寒いも彼岸までで、炎熱焼くが如くといわれた夏も、はや過ぎ去って、涼しい風が吹いてくる、その涼しさも、今迄暑かったからこそ、一層うれしく感ぜられるのでありましょう。この好時節の初に秋の彼岸の行事が行われることも意義深いことです。

従来、秋季皇盂祭が行われていた彼岸の中日は、終戦後、新しい祝日として「秋分の日」となり「祖先を敬い、なくなった人をしのぶ」祝日であるとせられました。これは全くわれらの祖先が、千數百年來、行ってきた行事の精神と一致するものだと思います。私共はこの際、この彼

岸の行事の精神を生かすように心がけ、更に仏教から來た彼岸の意味を明かにしてゆきたいと思うのであります。

いうまでもなく、彼岸は印度の言葉「パーラミター」(波羅密)を訳した言葉で、「此岸より彼岸に到る」という意味であります。此岸というのは、この現実の世界です、迷い、苦しみ、悩み、争いの絶え間ない世界であります。世界が二つに分れて冷戦がつづけられています。原爆禁止、軍縮、首脳会談、アルジェリア、レバノン、イラク等々、次から次へと変転極まりない、悩みの多い、争いのしげき世界であります。もっと手近な家庭生活や職場の生活を見ても、愛憎が渦巻いて、いろいろなもの、争いが絶えません。政治、経済、教育等、いずれの方面を見ても、苦、悩、迷、にとざされ、紛争がくりひろげられています。

す。これが此岸のすがたであります。これらの現実苦惱の此岸を乗り超えて、眞の平和、安寧寂靜の世界、悟りの世界、淨土、極楽と名付けられる彼岸に到達せんとするのが仏教の理想といえましょう。此岸を乗り超え、此岸の中に、彼岸の淨土を打ちたてようと精進する（聖道門）のも、また彼岸淨土の阿彌陀仏のお慈悲を仰ぎつつ、そのみ心を此岸に頂きあらわしてゆこうとする（淨土門）のも、何れも彼岸の世界をめざしているのであります。彼岸に到る聖行として、古来より六波羅密（六度）が説かれています。

一、布施波羅密——ほどこしをする。

二、持戒波羅密——仏教の戒を守る。

三、忍辱波羅密——堪え忍んでゆく。

四、精進波羅密——善に向ってはげみすすみゆく。

五、禪定波羅密——いつもしずけさを失わぬ。

六、智慧波羅密——眞に生きゆく智慧を身につける。

この六度を行ずるときに、彼岸に到達できるといわれるのであります。何れも尊い行ですから、各經典にも、くわしく説かれていることであります。私は右のうち、第三の忍辱波羅密について、特に感ずるところがありますので、ここに述べてみたいと思います。

この世を娑婆世界といいますが、娑婆（サバー）というのは印度の言葉で、「忍土」と訳しています。この世は思うままにならず、堪え忍ばねば、やってゆけない世界であります。だから娑婆世界は堪忍の世界のことでもあります。こうした事実に基づいて、仏教では、忍、即ち忍辱（にんにく）と読んでいます）を六度の一として尊ぶのであります。

忍辱こそ最上の行、苦しさをたえ忍ぶこそ、この上もなき涅槃なり。みほとけはかくいたまえり。まこと出家にして人を害うものなく、沙門にして他を悩ますことなし。（法句經三五二）

忍の徳たる持戒苦行も及ぶ能わざる所なり、能く忍を行う者は、乃ち名づけて有力の大人と言ふべし。（遺教經）

忍辱について、生忍と法忍と分けて説かれることもありまふ。生忍とは人々から恭敬尊敬せらるるも嬌慢の念を生ぜず、瞋を以て罵り、打ちなぐり、害せられるような目にあつても、こちらは瞋恚や憂愁を生ぜぬことであります。法忍というのは、寒熱風雨飢渴などに悩まされる場合にも能く安んじ、能く忍んで、いかりやうれいを生ぜぬいうのであります。

私共はどんな苦しいことでも、うくべきものは受けてゆ

かねばなりません、それを避けようとするれば一層苦しくなるものであります。寒暑風雨等の自然現象も、うくべきはすなおにうけてゆくべきであります。或時、元旦に雨がふりました、或人が「雨天にて悪しく候」というたのを、徳

本行者が開かれて、「すべて天地のことなど、とやこういうべきではない、雨風がなかったら、万物がどうして育ちゆく、唯天地を恐れ敬って念仏申されよ」といわれたということです。雨風のみならず、病氣でも災難でも、前々からの自らの行為や、周囲の事情によってあらわれた場合、即ち受くべき時にすなおにうけてゆくべきであります。うくべきものは「正しく受ける」この「正受」ということは忍辱の第一歩であり最も大切な心得であります。受くべきものは正しく受けてゆくぞと決意のできた時、即ち正受することができると、「不受」即ち受けないと同じ境地も味うことになるのであります。肩に重荷を負うている時、誰か他人が代って負うてくれないだらうかと思うと、その重荷は益々重く感ぜられてくる、しかるにその荷はどんなに重かろうと、私がどうしても負うてゆかねばならぬのだと決意ができた途端に、その重荷は軽く感ぜられるのであります。全責任を負うてたちあがる雄々しい心も「正受」から生じて参ります。受くべきものは受けてゆくとい

う正受ではあるが、それには多くの困難をとものうて、じつと堪え忍んでゆかねばならぬ場合が多いのであります。即ち正受はまた忍受であることが多いのであります。この忍受こそ困難打開の最上道といえましょう。

火に焼かれ鎚にうたれてくるがねも世にめづらしきつるぎとはなる

うたばうてたたかばたたけろがねもつるぎとぞなる
しのびとおせば
(弁栄上人)

味うべきお歌ではありませんか、忍受し忍受し、鍛えられ錬られて、且は阿弥陀如来に帰依する念仏者は、如来よろしきに導きたもうという信によって、それは安らかに忍びうる安忍ともなりうるのであります。

かように、正受、忍受、安忍してゆけば、必ず道は開けゆきます。今まで不幸であった、災難であつたと思つていたことも、実はよいことであつた、めぐまれたことであつたと拝みうける「拝受」となるに至るのであります。病氣のおかげで健康の尊さに気づき、真人生の道に気づかせて頂いたとなれば、病氣はもはや不幸でなくてめぐみであつたと拝受されてくる、子に先立たれたことは悲しみの極みであるが、子をなくしたことが動機となつて仏道に入るこ

とができた、あの子は私にとって善知識であつた、観音さ

まであったと拝まれる人もあります。かような境地に至れば、世に厭うべきものはなかった、みんなよきによきにと明るく進みうるよう私を育てる燈であったと拝受して力強く前進しうるに至るのであります。

私はこの忍辱波羅密の行も、念仏申す者にとつては、念仏の徳として、おのずからに忍辱行としてあらわれてくるものと頂いております。わが力は小さいが、絶大なる如来光明におさめられ、如来本願のお力に導かれて、忍辱行という名も知らずして、おのずからに忍辱行を行ぜしめられてゆくものであると思うのであります。人から罵詈謗を加えられ、はずかしめをうけ、悪口いわるれば、凡人として腹の立つものであります。しかし念仏者はただその生れつきのままで南無阿彌陀仏々々と如来にまかせて念仏申すばかりであります。念仏の中に、自らは力なきものながら、如来のお力によって忍受せしめられ、如来のおまもりの中に和顔を失わぬようにも導かれる、「忍辱なれば和顔なり」という仏陀のお言葉も念仏の中に養われてゆくのであります。

罵詈の矢もそしりの丸もとおらぬは忍ぶの衣あつければなり（弁栄上人）

「たとえ罵られうたるゝとも黙受して怒らざれ、忍辱

の力ある、これをバラモンとよばん。（出曜經）
忍ぶの衣厚くなるのも、忍辱の力あるのも、念仏者が如来より与えられる徳であると信ぜられるのであります。

かくしてうくべきものは正しく受け、如何なる困苦も忍受し、安忍し、拝受する中から自由な生活が開かれてきます。雨のふる時は雨のふるのがよろしく、風の吹く時は風のふくがよろしく、暑い時は暑いがよろしく、寒い時には寒いのがよろしい、病氣の時は病氣するがよろしく、悲しい時には泣くがよろしく、痛い時にはウナルがよろしく、死ぬときには死ぬがよろしくとまでなれば、もはや生死の煩いもなく、生死を超えた彼岸の世界に遊ぶことができるのであります。その時その事になりきって、さけようとせず正受し、道を切り開いてゆく、まことに忍辱行からは自由無碍の生活が展開されてゆくのであります。次の良寛さんの手紙の一節は、忍辱行の究境、自由無碍の境地を示された有がたい御文であります。

災難に逢ふ時節には災難に逢ふがよく候、死ぬる時には死ぬがよく候、是はこれ災難をのがるゝ妙法にて候（山田杜阜に宛てた文）

法華經に「如来の室に入り、如来の衣を着、如来の座に

座して経を説くべし」という有名な御文があります。そして如来の座とは一切衆生の中の大慈悲心であり、如来の衣とは柔和忍辱の心であり、如来の座とは一切法空であると言われています。法を説くものは柔和忍辱の心である如来の衣を着けていなければなりません。釈尊の御弟子の中に説法第一といわれたフルナ尊者は、遠い西方の未開国たるユロナ国に、仏の道を伝えんものと志し、釈尊のみ許に参り御挨拶申し上げました。

仏 西方のユロナ人は兇惡であると聞いているが、フルナよ、若し彼等が汝を罵ったら汝はどう思うか。

フ 私はかく念じます。この国民は賢善であり、智慧がある、私を罵ることはあっても、まだ手や石で打つに至らないからと。

仏 それでは若し手や石で打ったならばどうか。

フ それでも尚この国民は賢善で智慧があると念じます。手や石で打つことがあっても、刀杖で向わないからと。

仏 刀杖を加えることがあったらどうか。

フ 私を殺すまでに至らないから尚この国民は賢善で智慧があると念じます。

仏 まさに殺されんとしたらばどう思うか。

フ 仏弟子の中には、身の不淨を觀じて自殺したり、毒藥

を服したり、深坑に身を投げたりしてその身を亡ぼす者さえあります。然るにこの国民は賢善にして智慧があるから、私のこの魔残の身に対して雑作もない方法で、直ちに解脱させて下さるとは有りがたいと念じて死につきます。

仏 善いかな、フルナよ、汝は忍辱の行を積みえたものである。汝のような心がけてあれば、よく彼の人民の間にあって止住し、伝道するに堪えられるであらう、汝よろしく彼国に行つて、人民の未だ仏法に入らない者どもを仏法に入らしめ、未だ信仰を得ない者どもに信仰をえさしめ、未だ安樂の境界に至らない者どもを安樂ならしめよ。

と励まされました。フルナは歡喜踊躍して、仏の許を辞し、西方ユロナ国に旅立ち、彼地に伝道して忽ち五百人の信者を得、五百の伽藍(寺)を巡つてかの地に於て涅槃に入つたと、阿含經にあります。私はこの事を思うごとくにふりいたせられるのであります。

怨には怨をもってすべからず、いかにして終にをはることを得んや、忍を行ずれば、すなはち怨は息むことを得、これを如来の法と名づく(出曜經)

念仏して忍辱行の実踐をとおして世界真平和、大涅槃の彼岸が此岸にあらわれるように、念願するものであります。

鼻持のこと

伊藤辰造

つい先ごろ所用があつて、都下の西端A

町に新居を構えたばかりの、友人の家を訪ねたときのことである。

午後三時ごろ、焼附くような炎暑の折から縁先にくつろいで、家の人達と茶呑み話に花を咲かせていたところへ、行商の魚屋が現れて「今日は生きの良いのがあります」というわけ。

そこで妻女は、私に何かご馳走でもしようと思つたのであろう、丁度いい所へといった調子でいそいそと出ていったが、間もなく、表の方から大きな声で私を呼ぶのである。

ハハア、さては私に好物の品定めでもさせるのだらうと早合点、然らば見参に及ばうかと、やおら立ち上がつて行つてみるとコワ如何に。行商氏は点々とした口髭に、

様である。

ハテどうした事かと近寄るほどに、鼻を突いてきたのは生臭いどころではない、殆んど腐臭に近いものでトテモ鼻持ちならならぬ。妻女殿のむずかしい顔も至極もつともな次第である。板台には刺身だねや一匹づつ、室鯨の開きなど、中々に良い物が有つたけれどもツイ手が出ず、結局は身がきしゃの何本かを、それも決々に買つて暮。

話はただそれだけのことであるが、ここで一つ考えてみたいと思うことは、わたし等の思惑など、別に気に止めた風もなく立ち去つた行商氏のことである。

見るからに魚屋とも思えぬ、丁度、かつての賣出し部隊そのままの、活気の無い、つまり甚だ「生き」の悪い様子あい。従つて、何かと手並みも悪いらしく乗つてきた

得意げな微笑を浮かべて私にベコリとやつていたが、一方の妻女はというと、これはまたイトモかんばんしからぬ面持で板台の中をメメ廻している有

自転車はさておき、肝腎の板台までがどことなく薄ぎたない。よほど手入れをしてさえ、得てして生臭くなり勝な容器がこの調子では、増して暑さのさなか全く鼻が持てる筈がない。

然し、当人はその悪臭も、鼻に着いて——ある意味では主観的或は利己的慣性に陥つて——いたとみえて氣の方は一向につかぬらしい。そんな具合だから、客に買ひかえれたからといって、格別氣にも止まらぬ訳である。

切角の品物を持ちながら商内^{あかぬ}を仕事を仕損なつた現実を見ては他人事ではない、吾々自身の事としても深く味わつてみなければならぬまい。

洒落ではないけれども、「らしく臭からず」という言葉が今更のようにピンと来る。吾々とても、様々な形で鼻持ちならぬものを多分に持ち合せているに違いない。若し吾々に心のくぼりなり、反省する心になつたならば、恐らくは誰でも、生涯、人生の引け目を負わされることになるのではあるまいか。心したいものである。



庶民と念仏

(四)

— 念 仏 生 活 —

一 瀬 直 行

人間の一生は二つとなく、一つしかない。生涯のうちで、今という瞬間は、二度とめぐって来ない。こんな当り前のことを。今更に私は考え、そこにある厳肅さを感じています。

人間一度は死ぬものだ。いくら欲ばってみても、死ぬ時が来れば死ぬのだ。こんな当り前のことを考え、そこに一種の厳肅さを感じております。

誰にも今日という日は、二度とめぐって来ないものとすれば、一日たりと云えども大切にしなければならぬと思います。だからと云って、あさましい程、仕事や生活の上に、がんばりをきかせろという意味で

はなく、むしろ鷹揚な位、腰の坐った、悔いの残らない、充実した一日を送ってゆきたいと願うものです。だが、口にはやすく、さて行う段となると、並大抵なわざではありません。

人間一度は死ぬ。とすれば、もつと死をおそれるものではないでしょうか。たゞ死ぬことをおそれるという意味ではなく死の厳肅さを、もつと尊ばなければいけないのではないのでしょうか。

よく世間の人達の間でみうけますが、電車にのついても、念仏をとなえています。食事をとりながらも、又銭勘定をしながらも、念仏をとなえています。まるで口

ぐせのように、どんな場合でも、となえているのをみうけます。勿論それが悪いというのではない。だが、口先きだけでとなえることよりも、心でとなえるべきではないでしょうか。心の奥から自ずとしみ出て来るのでなくてはいいけないと思います。念仏は単なる形式ではなく、そこにはとなえる人の生命が、脈々と流うつていてこそ、深い信仰と云えます。

お金の勘定をしながら念仏をとなえている人を見ると、金が欲しいときこえて来ます。あさましい目つきで、肩いからせ、念仏をとなえている人を見ると、名声が欲しいときこえて来ます。

法然上人がさとりをひらき、教えをとかれるに至るまでには、容易ならぬ辛苦の果ての結実と申されましよう。到底凡人の及ぶところではありません。ところが、そうしてみのつたさとりと教えを、かりにこれの一つの花にたとえれば、それを無雑作にもぎとって、自分の身に飾り、得々としていきます。花をさかせるまでには、幾多の年月と幾多の労苦をのり越えて、ようやくみのつたことを知りません。ただ美しい花を胸にかざって、安心し、喜んでおります。ほこりさえ感じていきます。こんな冒瀆はないと思います。

法然上人は、ひたすら教えを信じて念仏をとなえれば救われると聞いています。悪人でさえも心に念仏をとなえれば救われるとまでと聞いています。そうだからと云ってこれを有難く、頂戴に及んで、そこでらしくと腹そべっていても、よいのでしょうか。私にはこんな甘え方や怠慢を信じることが出来ません。もしそんなことが許される位なら、私は煩惱の泥沼の中で、もたえ苦しむ人間の誠実さの方にくみします。

法然上人は自ら庶民の中に入ってゆき、つまり粗末な住居に、粗末な墨染の衣をまとって、いつくしみの手を一人々々にさしのべ、しっかりと握ってはなさなかつたのと

良寛仏歌

他力とは野中に立てし竹なれや
よりさはらぬを他力とぞいふ

極楽に我が父母ちちはははおはすらむ
今日膝もとへ行くと思へば

法の塵に汚れぬ人はありと聞けど
正眼にひとめ見しことあらず

云えましよう。そこには当時の下積みにおかれた庶民のみじめな生活を見てとられて光明の手をさしのべてゆかれたのだと思います。法然上人の教えは限られた一部の階

級のものでなく、常に庶民と共にあり、庶民の中にひろく根をはっていったと申されましよう。

今も尚。私は日頃自分の疑惑の手綱をゆるめないでいます。それは念仏を疑うことではありません。今日の世の中のあり方、人間のあり方、そうしたことに常に疑惑を抱いております。到底目前の姿を、素直にありの儘に肯定する気にはなれません。まことに不信の徒ですが、これを裏返して云えば、あくまで人間を信じたいからにはかなりません。

戦場の兵隊さんが、うたれて倒れる時、「お母さん！」と、ひとこと叫んで、露と消えてゆく語を、よくきいております。兵隊さんには、この世の最後の言葉になるわけです。特に日頃からそう心がけていたわけでもないでしょうが、これがこの世の最後だという時、「お母さん！」と、思わず苦しい中で叫んでいます。勿論お母さんとは生みの母のことです。母の恩愛に対する子の敬慕が、この世のわかれに、思わず口をついて出たのでしょう。それは心の救い

になるに相違ありません。生みの母であることは動かすことが出来ませんが、これを一つの象徴とみて、そこには人間の力の及ばない絶対の慈愛を求めて、それが最後の言葉、母となってあらわれたと、解することも出来ます。阿弥陀さまのいくしみにすがって、南無阿弥陀仏となえるのも、同じ意味あいになります。

今度の戦争では、誰しも生死の境をくぐり抜けて来ました。誰しもが、生きるか、死ぬかのぎりぎりのところまで追いつめられた体験をもっています。

私も幾度となく、そんな羽目におち入り経験して来ました。又周囲の町の人達の間に、そうした姿をみて来ました。

そうした時、恐怖のどん底にふるえながら、も早や駄目だと観念しながらも、尚人間はなにかにすがり付いて、生命が助かりたいと、思わず一心に念じるものです。これは貴重な体験だと云えます、どうしたらよいか、ただ周章狼狽する。そうした境地より更に突き抜けた、恐怖心こえ凍えてしまったような、切実なところへたち至った

時には、ひたすらなにかを念じます。これをもって臆病な心の消極的な弱まりと解することも出来ましょうが、自分の生命が救われ、更に強く生き抜くという積極的な願望、願いであるとも解することが出来ます。その点にこそ、人間の本性をうかがい知り、人間の使命の大切さを知ることが出来ます。

それにしても戦争は無慈悲の一語につきまします。昨夜までは家族達や隣人と共に語り共にはげまし合っていたのが、一夜の空襲で、自分は助かったが、相手は死んでしまふ。死ななければならぬ理由も、なんの咎もないのに、あっさり生命をたたれてしまふ。然かも無限に、大量に、ころがってゆくのです。こんな慈悲心のない、残酷なしうちはないと思うが、それが戦争というものであるということを、今更に考えないではいられません。

人はだたんに追いつめられた時、つまり自分の力では及ばない、生死の境にたたされた時、平常心にもとめていなかった人までが、専心口に念仏をとなえています。

扉の御法語

「念仏すれば往生すべしという事、耳なれたるやうにあらながら……」と上人に聞いたのが「十二箇条問答」です。

本願の不思議を決して疑うわけではないけれど、自分の如き浅ましいものまでがと省みれば省みる程、自分かわいさに真剣になればなる程、ふと疑われないわけにゆきません。たまりかねて上人の前に進み、恐る恐るお尋ねしないわけにゆきません。この質問をするのは恥かしいのですが、やはり上人に直接質ねてみたい。これがこの問答集です。この単純な、しかしひたむきな、正直ないろいろの質問に対して、上人はけっして粗末にしない親切なお教えをしてくれます。そして有名な御法語「罪業のおもき事は、石のごとくなれども、本願のふねにのりぬれば生死のうみにしづむ事なく、かならず、往生する也。ゆめゆめわが身の罪業によりて、本願の不思議をうたがはせ給ふべからず。これを他力の往生とは申也」も

どうか自分の生命が助かりますようにと、必死に念仏をとなえている姿を、しばしばみうけました。その一途の願いこそ、尊い姿と云えます。死にたくはないという我執にとらわれた狭い意味からではなく、生命の尊さを知っていればこそそのことだと思います。

私も或る時は、汽車にのって、敵機に襲われ、車の下にもぐって、線路上に這いつくばりながら、心に念仏をとなえました。又ある時は一面焼け野原で、身を隠す所もない中で、敵機のねらいうちにあい、心に念仏をとなえました。そうした場合に幾度遭遇して来たかわかりません。

私は戦後間もなく、三才になる女の子を病名もはっきりしないうちに、とられてしまいました。その頃のことですから、充分に手をつくすことが出来ませんでした。今日なら死なせないですんだかもしれせん。子供をなくした親の悲しみは、又別です。こればかりは人にわかるように説明することが出来なく、深刻です。私は死んでいた子に、ひたすらただ詫びました。そ

してそれだけのことで精一ばいで、あとは念仏をとなえました。

その時、お医者様は駄目だ。とても助からないと、みはなしています。三四日続いた高い熱はひきません。私は枕元で、昼夜看護しておりましたが、親のよく目からみても、駄目かもしれないと、わかっていても尚どうかこの小さな生命を助けてやって下さいと、一心に念仏をとなえました。既に寿命が過ぎたのだとあきらめ、みすこすことが出来ません。どうしても救ってやりたいという強い愛情を、おさえることが出来ませんでした。愚かとみられるかもしれませんが、そうであっても、念仏をとなえ、阿弥陀さまにすがりました。が、やがて駄目なものは駄目で、静かに目蓋をとり、小さな手足は、刻一刻冷たくなって、こときれました。

さてそうしてみると、今度は自分にも不思議な位に、あわてるようなことなく、動じるようなことなく、大きな自然の力に素直におまかせすることが出来ました。(了)
(四月二十六、二十七日、NHK、人生読本放送)

この問答にあります。

さて扉の御法語も、「十二個条問答」にある一節です。念仏を念々相續すべしと自分で自分の心をはげますわけですが職業のこと、家族のこと、その他もろもろの事柄に追われ追われて、気がつけば念仏を申しでない自分を見出すわけです。それではと、手に念珠をとって仏の前に座って、お念仏を申すのですが、実をいうと念仏の自分の声を耳にしながら頭の中ではフト昨日のこと明日のこと等がかすめてゆきます。これではいけないと知りながら自分の力では致し方のない実態なのです。こんなことでは、とても「往生の業にはかなひがたくや候はんずらん」と、嘆息とともに上人に訴えましました。

これに対して上人は、それぞれの人ができるだけ精一杯に念仏申せばよいのだと、やさしく諭しています。そして「念仏の時、悪業のおもはる事は……」とはげましています。親子の例をとって根本さえ見逃がさなければ、僅かのことで縁の切れることはないと申されています。

張^な夫^き人^つ還^ま魂^と記^の

牧尾良海



唐^{きやう}暄は晉昌縣の人である。彼の叔母は張恭という人に嫁いだのであるが、この張恭という人物は、昔から有名な安定郡の張士彦の子孫で、當時は滑州の衛南縣に隱居して、世間の人々からも尊敬されていた。

この張恭夫妻には息子が三人あり、皆、進士に挙げられた。娘も三人あって、長女は辛家へ嫁ぎ、次女は梁家へ嫁いだ。末娘は叔母

も一番可愛がっていて、詩歌の道やら礼儀作法やら色々習わせ、すっかり修養を身につけさせた。開元年間に父親の張恭は世を去ったが、一番可愛がられていた末娘とて、彼女の歎きぶりは殊のほか痛ましかった。そんな優しさが氣に入ったのであろう、唐暄は前から彼女が好きだったので、服喪の服間が終ると、早速彼女を娶って妻とし、衛南の館に住まわせておいた。

開元十八年のこと、唐暄は用務で洛陽に上ったが、都合で、数カ月も衛南へ帰ることが

う意味であり、井戸を覗いて笑うというのは、黄泉の道を喜ぶことを現わしているのです」

と判断を下した。それから四五日経つと、果して妻の張氏が死んだという凶報が伝えられて来たのである。唐暄の悲歎は大きかった。それから二三年経って、唐暄はようやく衛南へ帰ることができた。

彼は、妻が住んでいた家で、ありし日頃の彼女の遺品の数々を見るにつけ、又新らしく深い悲しみを覚えて、追慕の詩を作った。

できなかった。ある夜、彼は旅館に泊っていたが、衛南に残して来た妻が、花を隔ててその向うで泣いたかと思うと今度は急に井戸を覗きこんで笑っているという夢をみた。

唐暄は、いやな夢をみたものだと思ひしだして、朝になると早速夢占いにみてもらった。するとその占者は、

「花を隔て泣くというのは、容貌が風に随って衰えるとい

幽闇の長椅子見ればそぞろ悲しく、
化粧の間に、鏡の涙をさそう。

桃李、今、花盛りなれども、

よみ路には花開かざるを傷む。

魂よ、もし心あらば、

さながらに、夢にぞ来ませ。

今、一首、そのかみの妻を想い、鏡に映る月を見て、眉をひそめた時の彼女の美しさを偲ぶ詩を作った。

この晩は、風も清く、露が白々と珠をむすぶほどに静かであった。唐暉は、亡妻を思う情で眼が冴えて、中々寝付かれそうにもないので、夜が更けるまで先刻作った二首の詩を沈んだ調子で口吟していた。

丁度その時である。暗闇の彼方から、まるですゝり泣く様な声が聞えて来た。始めは遠くの方で聞えたが、次第にそれがこちらの方へ近付いて来る気配であった。唐暉は驚いて、何か異様な空気が漂っているのを感じ取った。彼はそこで、神霊に祈りをささげてから、

「若し、わが妻張氏の陰霊ならば、どうして早く、その姿を現わして私に声をかけてくれぬのだ？幽冥界とこの現し世と隔てがあるからと言っても、私とお前との間柄だもの、そんな遠慮は全く無用のことではないか！」と呼びかけてみた。すると、それに対してすぐに暗闇の向うから声が聞えて来た。

「仰せのとおり、妾は張氏なのでございます。貴郎が悲しい詩をお歌いになって、この妾を憶っていて下さるのを聞きますと、冥界におりましたも本当に辛うございます。既に死に果てましたこの妾をお見棄てなさらずに、いつも憶い出して下さいまして、何ともお礼の申し様がございません。その為今夜は、貴郎にお会いして、積るお話をしようとして参ったのでございます」

唐暉は懐かしい妻の聲に驚くとともに、感激の涙にむせびながら言った。

「お前に対する私の思いといったら、それこそ山ほど沢山にあるのだよ。お前の顔をちょっとでも見ることができさえすれば、それで死んでも悔いすることはないくらいだよ」
「冥界と陽界とは、分け隔てがきびしうござ

いますので、お目にかかるといっても容易なことではありません。それに又、貴郎が妾のことをお疑いになりはしないか、それが心配で堪りません。妾だって、一時も早く貴郎とお話を交したくて仕様がありません」

そこで唐暉は、鄭重に言葉を尽くして彼女が妾を現わしてくれるように頼み、露ほども疑いを抱かぬことを誓約した。

間もなく、彼女が羅敷という侍女を呼んで、鏡を持ってくる様に言いつけている声が聞えて来た。同時に、暗闇の中でさや、さと絹ずれの音がして、誰が行ったり来たりしている気配がした。

やがて、侍女の羅敷がすうつと姿を現わして来て、唐暉の前へ進み出てお辞儀をし、それから口を開いた。

「奥様が、昔の憶い出話をなさるため、これから旦那様にお目にかかるそうです」

唐暉は羅敷に尋ねてみた。

「私は、開元八年にお前を抵当代りに仙州の康という家へやったんだが、その後、康家で死んだというのを聞いていた。それがどうしてここに居るんだね？」

「はい。あれから後、奥様に買ひもどして
いただいて、御一緒のところに居り、今では
あの阿美ちゃんのお世話をしています」

阿美ちゃんというのは、小さいうちに死んだ唐暉の娘の名である。阿美までも一緒だと聞いて、唐暉は今更ながら一段と深い悲しみを覚えた。

やがて、灯を用意させると、片時も忘れたことのない亡妻の張氏そのひとが東側の階段の北のところに姿を現わした。唐暉は、走り寄って行くと、懷しさに泣かんばかりになつて挨拶をした。張氏もこれに答えてお辭儀をした。唐暉は彼女の手をとつて握りしめ、色々と言ふことを語り始めた。

彼女も涙にくれながら、

「陰・陽境をことに致しまして、貴郎とお別れしてから随分久しく経ちました。あの世は暗くて心細いところですけど、貴郎のこととはついぞ忘れたことがございません。今日は折良く月建と月將とが相合うという六合の日でございますので、冥府のお役人が貴郎の真心に感動されたあまり、妾がここへ来られる様に暫らく放免してくれたのです。こんな

孔雀の糞

昔、インドのある河で、二人の若者が泳いでいた。すると川上から、一握りの毛が、ふわふわと流れて来た。一人の若者が、これを見付けて、早速に手にとつてみると、今まで見たことのない毛なので、も一人の若者にもみせて「これは一体の毛だろう」と色々に論議した。一人の若者が「これは、きっと仙人の毛だ」というと、も一人の若者は「いや、そうじゃない。これはひぐまの毛だ」と、仲々に意見が一致しない。

そこで、二人は「いっそ、山の仙人のところへ行つて、きいてみよう」ということか。
二人の若者には、無駄なことに、骨折りと時間を空費したことが、わかつただろう
(百喻經より)

機会はそれこそめつたにないことで、嬉しいやら悲しいやらで胸がいっぱいです。阿美ちゃんもまだ小さくて、しっかりした後福もありませんわ。でも、今夜という今夜は、何となく良い折なんでしょう。貴郎とこうして又むつまじくお話ができるなんて、本当に嬉しいわ。」

唐暉は、家人を呼んで、一人一人張氏に挨拶をさせると、明りを部屋の中へ移した。そこで帷帳を深くおろして、まず張氏を席につかせようとしたが、張氏は坐ろうとしないので、

にして、山奥の仙人のところにまで、出かけていつて、

岩の上に坐つて、修行し

「陰人と陽人とは、生きている陽人の方が尊いのです。貴郎がまずお坐りにならなければ、妾、坐れませんわ」

と言うので、唐垣は彼女の言うとおりに先に着席した。彼女はほほ笑みながら、

「貴郎のお情けのほどは、もうせんとちつとも変りありませんわ。でも、おあとをお貰いになったそうですね。今度の奥様と妾とは、どんな違いがありまして？　いかがです」

といったずらっぽく言うのである。

唐垣は何とも悲しく、又はずかしい気持ちでいると、

「でも、あとをお貰いになるのは当り前ですわ。今度の奥さんは淮南にいらっしゃるんでしょう？　いいお方だということを妾も知っていますわ」

と言うのである。それからよもやまの話をした。一体、人間の寿命の長短にはきまりがあるのかどうかを訊ねてみると、

「ちゃんと定められておりますわ」と答えた。

「仏教では前世の因縁ということ言うん

だが、そのとおりなのか」

「どこかにその道理は現われるものです。

間違いはありません」

「仏教と道教とは、どちらが正しいのかね？」

「源は同じで、唯、派が違ふだけのことで。冥界には、別に太極の仙神・靈界のことを一切統べる役人がいます。有から出て無に入るその玄化の力は実に大したものです。その他の事は、人間界で普段に言われているとおりです。でも、今ここではさし、わりがありますから、これ以上委しくは申し上げられません」

唐垣も恐れをなして、そこで話題を代えた。

「食事を上げようと思うが、何が食べたいかね？」

「冥府では、御馳走は何でもありますの。

ただ、薄粥うすかゆだけはないので食べられません」

唐垣はそこで早速薄粥を支度させた。粥が運ばれて来ると、彼女は別のお碗を頼んで、それですくって食べ始めた。口のところに持つてゆくと吸りこんでしまった様に見えるが、口からお碗を離すと、粥は依然としても

とのままであった。彼女について来ていた従者たちにも粥をやったが、一人の老女だけは皆と同席しなかった。張氏は、

「この婆やは古参なものですから、他の連中と一緒に居るんですよ。この人は、ほら、あの紫菊婆やですよ。貴郎、覚えていらっしゃいませんか？」

と言うので、唐垣も思い出して、この婆やだけは席を別にして食べさせてやった。他の従者は、彼が全然見たこともない連中ばかりである。彼女がその名前を呼ぶのを聞いていると、彼が都から帰る時に、紙で娼僕の人型を剪って名前を記したときのその名字らしく、訊いてみると、

「みんな、貴郎が妾に供えて下さったものですよ」

と言った。唐垣が心をこめて紙銭や婢僕の人型を焼いて供えたのを、張氏は冥府でうけて、それを自分の用にあてていたのである。

「貴郎、阿美ちゃんを見てやってくださいませんか？　随分大きくなりましたのよ」

「阿美が死んだ時は、まだおむつをしてい

たのに、冥土でも年をとって六きくなものかね？」

「それは、地上と変りありませんわ」

間もなく、美娘がそこへ現われた。五六才ぐらいである。唐暉は美娘の頭を撫でながら又涙にくれた。すると、張氏が急いで、

「貴郎、阿美ちゃんを抱いたりして、驚かせては駄目ですよ。羅敷や！ 阿美をもうそっちへ連れておいで！」

と言ったので、娘の姿は見えなくなった。

やがて唐暉は、寝台のカーテンを引いて、久方ぶりに張氏を抱擁した。凡ては存命の頃の彼女と変りはなかったが、ただ彼女の手足や懊悩の吐息だけは冷たかった。

平素は冥土の中の何処に居るのか訊くと、

「おしうと様たちのおそばに居ります」

と言った。

「あんたは既に靈妙な働きができるんだから、もう一度この世へ帰って来れないものかね？」

「人は一旦死にますと、魂魄が離れてそれぞれに登録されますので、身体とは何の関係もなくなります。夢でこれに似たことがあり

ますが、お気付きになりませんかしら？ 夢

で、自分の身体を憶えていることができまして？ 妾のいうのもそれと同じ道理です。妾も、死にましてから、死んだ当時のことを

少しも憶えて居りませんわ。何処へ埋葬されたのやら、それすら判りません。お錢やし、も

べなどは、貴方が供えて下さったものを頂いて持っているだけです。妾の亡骸がどうなったか、一向に存じておりません」

いろいろと話し合いながら、魚水相和して愛しんでいるうちに、夜も段々と更けて行つた。やがて、唐暉が、

「私もお前と同じ場所へ埋められるんだが、そう遠い先のことでもあるまいよ」というと、張氏は慌ててたしなめた。

「いいえ、合葬して骸は同じ場所へ納めても、心は一緒にはなれぬということを聞いていますわ。そんな哀しいことをおっしゃってはいけませんわ」

唐暉が、又訊ねた。

「女は、死んで冥界へ行ってから、又再婚するということもあるかねえ」

「それは、生きている時と同じです。貞節

か、そうでないかは、その人によつたもので

すわ。妾が死にました時、両親は、妾がひとりで節を守りぬこうというのにお許しがな

く、妾を北庭都護の鄭乾觀の甥で、独身のままで死んだ明遠という人により強いに再婚させようとした。でも、妾、操を貫ぬこう

と誓いを立て、何と言われても承知しませんでした。それで皆さんも妾を憐れんで下さって、漸く免れることができたので、まだ

再婚なんかしていませんわ」

唐暉は、彼女のいじらしい心根に深く動かされて、詩を一首贈った。

譯陽の桐の男女樹、ひともとは枯れ、

延津の双剣、女剣は沈みたり。

いかにせん、そのかみの、

百年かけての誓い、今ぞ空しき。

張氏も感動して言った。

「今日こそ貴郎の本当のおなさが解って

、嬉しうございます。妾も詩を一首お礼に残したいのですけれど、宜しいかしら？」

そこで唐暉が、

「以前には、お前は詩なんか作ったことがなかったが、本当に作れるのかね？」と訊ねると、

「妾、詩文を作るのはもう先から好きでしたのよ。でも、貴郎が、妾のことを生意気でいやな女だと思ひになると困ると思つて、わざとには作らなかったのです。しかし、詩は自分の思ひのたけを伝えるものだと言いますから、今夜こそ遠慮しないで作りますわ」とて、帯を裂いて詩を題した。

ゆくりかにおのがじし世を別にして昔を今にかえす由なし。

陰陽の逢隔てあらば、逢うも別れもままならず。

今一つの詩はこうであつた。

蘭階、月光は斜めにさして、
燭台の炎は半開の花にも似たり。
憐れ、吾は長夜の旅人なれば、
くらきよみ路ぞ吾が家なれや。

唐暉は涙ぐみながら、なお色々と話し合つた。こうして儚い逢瀬の悦びのうちにも、時間は遠慮なく過ぎて、やがて夜も明けかつた。門を叩いて帰りを促がす声が聞えて来

た。門を叩いて帰りを促がす声が聞えて来る。例の菰菊婆やが丹参という侍女に言伝ことづてして、夜が明けてしまつと冥府の役人のとがめを受けるからと言つて来たのである。張氏は泣く泣く起き上つて別れを告げた。唐暉は手紙を一通したためて、冥府にいる両親に渡してくれるように頼んだ。彼女が乱れた着物を直している時、どこにたきしめてあるのか、えも言われぬ芳ばしい香の匂いが流れて来た。

「その香は、一体どこで手に入れたものかね？」

唐暉が訊ねると、

「之は、昔、賈午が韓寿に与えたという珍らしい。銘香の残りで、妾がここへ参りますときに、御両親様から頂きましたの。」

と答えた。名残りをおしんで唐暉が、

「今度は、いつお前に会えるだろうか？」

と訊くと、張氏は、

「四十年経ちますと、又会えますわ」

と答えて、薄絹の切れを形見にくれた。彼の方でも寶石をはめこんだ黄金製の小簪を張氏にやつた。

「時間が限られていますので、いつまでも留まることができません。今から四十年の後でないと、たとえ妾のお墓でどんなにお祭りをしても下さなくても、何の甲斐もありません。どうしても供養したいと思ひ召したら、月末の黄昏どきに野天か或いは河の中で妾の名字をお呼び下さいませ。そうして下さいませ、お供えものもみんな戴くことができます。もう、時間がないので、長くはお話をしておられません。どうぞ、呉々もお大事にお過ごし下さいませ」

張氏はこう言い終ると、迎いの車に乗って出て行つた。手中を振りながら唐暉の方をふり返つて、名残りを惜しんでいたが、やがてふつと朝もやの薄の明中へ消えてしまった。

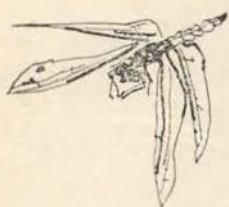
(原名「唐暉手記」通幽記より)

(大正大学教授)

x x x

法然上人をめぐる人々

——尼將軍と遊女——



井川定慶

一、本為凡夫

法然上人は立教開宗の宣言ともいふべきお言葉に「われ浄土宗を立つる心は凡夫の報土（西方極樂の浄土）に生れしめんが為めなり」とある。即ち平々凡々たる一般大衆を救済しようというのが御本意であった。凡夫というのが人間世界の大多數をしめているから、その大衆を目あてにした宗教でありたかったと察せられる。

ところがそれまでの仏教界には実に不思議な慣習が流れていた。即ち婦人を除外す

るということである。人間の半数をしめる婦人を排除した救済が仏のお慈悲なのでしようか。

これは明かに間違っている。男も女も共に救われるということをはッキリさせねばならぬと考えられて法然上人は、それまで欠けていた婦人の階層に念仏教化の道を開拓して行かれたのである。

せきとめられていた水が一度でハメを外すとドツと勢いつけて奔流となるように法然上人の浄土の法門は婦人のために明け放たれるや否や忽ちに拡って行ったのである。高野の山でも比叡山でも女人禁制の鉄則は厳重であったことは有名である。一般に知れ渡っている例証に彼の石童丸が刈藻道

心を尋ねて行く際にその母が高野山の麓まで来て女人堂で待ちうける物語がある。

明治の維新でその禁制は解除されたけれども現在なお大和の大峯山へは絶対に婦人の登嶺を許さぬのは女人禁制のせめてもの名残りであろう。

若い僧侶の修業している霊山へ婦人を近づけないことは道心によるめきがあつてはならないという配慮に基いている。しかし考えてみるとそれは余りにも男性の専断であり、今からいうと確かに婦人の人権蹂躪である。別に男女同権という言葉を持ち出すまでもなく明かに仏の「平等の慈悲」に背いている。法然上人はそこを是正せられたとも云えるし、男女同権を呼び且つ実行せられた先駆者とも見える。

かくて法然上人の人氣は婦人の間に高まつて行った。

二、尼將軍

庶民教化を本領とせられた法然上人ではあつたが、日本浄土教の元祖であると同時に大乘円頓菩薩戒の正統伝持者であつたというところから高倉天皇、後白河法皇、後

鳥羽天皇のために授戒し御剃髪の師範をつとめられ、時の關白九条兼実公の邸宅へも度々招かれて授戒の作法を行い念仏の教を説き示されている。つまり宮廷に近づくことにもなった。これは恐らく上人としては思いがけないトーンでもない事態に踏み込んだと感懐を新たにせられていたであろう。

そこへまた一大事件が降り湧いて来た。

それは東大寺の大仏殿再建の勸進職の勅命降下である。上人は「自分にはお念仏を弘める大きな仕事がありますから御辞退申し上げます」とお断りになり、続いて代理を出せよとの仰せを畏み遂に俊乗坊重源を推薦して代行せしめ立派に東大寺大仏殿は「天竺様」という新形式の建築で完成するのであるが、其の落慶供養の際には後白河法皇の臨幸があり、事実上の大施主である鎌倉幕府の將軍源頼朝とその夫人政子も列席してまことに華かな式典がくりのべられたことであろう。その日の「御供養」として俊乗坊は自分の師僧である法然上人を特招して大仏殿の前のひさしに机を持ち出して浄土教の講説の苑が開かれた。政子夫人

も神妙に浄土の法門に耳を傾け、深く感動したことであった。その後鎌倉に下ってからも度々僧侶問答の文通が法然上人との間にくり返えされている。その一部は勅修御伝に集録されている通りである。

女も男なみになったと心の落ちつきと自信とを得た政子は頼朝の没後、「尼將軍」の異名をとる程に政治の実際に関与しているし、京都の御所を守護する「大番役」(近衛師団長)に婦人が男に代って奉仕してもよいという制令を発するまでに婦人の地位が高上したのも考えてみると法然上人の女も男と同様に取扱われるべきだという説法に端を発しているようである。

三、遊女教化

婦人への念仏教化のよき反面に困った事件が突発した。後鳥羽上皇が紀州の熊野權現へ參幸のお留守に官女が院の御所をぬけ出して鹿谷その禪房を尋ね、居合せた上人の弟子信運と安樂とにせがんで尼になったという、普通に松虫と鈴虫との二人とよびなされている。二人は自分は勿論、剃髪の師範への後難を恐れて遠く西国に落ちのび

て行ったが後鳥羽院が相談されて寵姫(松虫、鈴虫)の出家剃髪のことと知られ、大いに逆鱗にふれために信運、安樂は死刑に、師の法然上人にまで罪が及んで流刑されることになった。七十五才の老齡の上人であったが何の恨み言もなく却て、「報恩なり」と歎かれて都を出でたち鳥羽から船に乗って淀川を下り江口(今の尼崎)に、それから海岸ぞいに兵庫、高砂へと行く行く道すがら念仏教化をして行かれたのである。別けて江口、高砂、室の泊などの船着き場に特有の遊女たち(近頃まであった赤練青練の類い)が法然上人の法衣の袖にすがりつき「かかかる罪深きものも助けられましょうぞや」と。懇ろな上人の説法を聴聞し、上人を送ったあとでも念仏を相続し庵室に籠り尼の姿に改めて遂に目出たく、往生の素懷を遂げたという。今もなお尼ヶ崎市の某寺に当時の遊女が剃り落した毛髪が宝物となって保存せられていと聞く。

上人に法を聞くものは權勢の座にいた尼將軍政子夫人を始め官廷の官女、さては船着き場の遊女から海人漁人にいたるまで実に広範囲に及んでいる。



(墓上人上光金)

金光上人墓地参拜記

間 山 泰 宣

七月一日から五日迄の五日間、青森教区としては実に二十二年振りで、教学高等講習会が開催された。場所は本州の玄関口である青森市寺町正覚寺(住職楠美知行師)である。講師は阿川貫達先生、佐藤賢順先生、竹中信常先生、法式の吉水大信先生、八百谷孝保先生、科外の講師として青森市東奥日報主筆楠美隆之進先生、講師ではないけれども、京都総本山知恩院から井川定慶先生の御顔も見られた。

心根に徹する諸先生方の念仏復興に就いて

の、蓄蓄を傾けられました講義は、念仏興隆の明日への、新しい布教伝道に力強く躍動する源泉となるものでありました。聴講に集う方々は、遠き道をも考えず、北は函館教区南しては秋田教区、岩手教区、山形教区、宮城教区、福島教区、それに関東方面栃木教区からも一名参加され、主催側青森教区を加えると、総数実に百二十七名の多数でありました。

一日の開講、二日の講義、三日午前の講義終了後、青森教区主催の、宗祖大師七百五十年御遠忌一宗法要が営まれ、青森県下の戦死戦災死者の法要も併せて厳修され、東北、北海道の法然上人末流門徒が百二十七名一座に結集して、祖法の研修する時機会として、こ

の悲境不運な戦死、戦災死亡者の靈に御回向申すことも、まことに念仏宗にふさわしきことで、大導師は小林大嚴宗務長、副導師は各教区代表一名宛、参列する者は、青森県内寺院檀信徒総代方数十名、青森県遺族会長、青森市遺族会長、県内各寺院遺族代表、青森市一般遺族並びに普通参拝者等多数で、雅楽の中に法要が進められ、厳かな式に参列者の眼もぬれた。香煙法燈掃らぎ、本堂を一杯に埋められた参拝者の口からは、念仏を唱うる声が満ちて、悲しき戦争犠牲者の靈も、誠に以て冥せられたことと思われまします。

四日目の午後二時三十分の講義終了後、午後二時四十分、青森市富貴切リバスで、青森県南津軽郡浪岡町北中野にある。浄土宗西光

院開山で、法然上人の直弟であらせらる、石垣金光上人の御墓に参拝する計画が立てられてあったが、市営バスである為め、係員が遺憾なく役人根情をさらけ出し、公僕の手は目もあてられぬ程悪く、予定の時間に遅れること四十五分にして、漸く車を西方に走らせることが出来た。この点主催側として御詫びを申し上げます。

不快な気持ちを抱いたまま、車は青森の旧市から離れ出て、津軽の真夏の緑の野面を左右に眺めることが出来た頃、西方遙かに、法然上人の念仏を弘通せんが為めに、金光上人が苦闘せられた梵珠山の山なみが見えて来た。

その昔は、聘道自力難行道であった真言宗が非常に盛んであったこの土地に、口称一行の念仏の法灯を輝かす為めに、どんなにか金光上人が荆の道を御歩きなされたことであろう。この梵珠の山は、冬ともなれば丈に近い積雪が見られ、寒気殊の外厳しく、食を得ることもまた苦難の一つであった。しかも身は暖国九州に御生れになり、寒國の御生活の経験が無いのに、念仏の法門興隆と求道の為めとは申しながら、その御苦痛の程が、心いた

く慰まれます。今日青森教区における寺院の数は、寺号を公称するもの百五十カ寺、未だ寺号を公称せざる念仏庵が五十カ寺あって、まさに他宗を圧しております。これ皆金光上人の御遺徳によるものであります。

車が進む程に、梵珠山の麓、大釈迦峠を越



(金光上人感得の阿弥陀如来)

に申訳がなかった。

車の止ったところから約十五分、石ころの多い農村の道で、歩くのも御苦勞様でありました。額に汗を流し、口には渴を覚え、それでも一行の方々は元氣よく談笑の中に歩かれた。この道は、私としては始めてでありますので自信がなかった。御案内申上るのに道を遅れては申訳が無いので、実は不安であった。道に遊んでおられた小学生に向って、金光上人の御墓へ御参りするには、この道でよろしいかと尋ねると、然りと答えてくれた。この答を聞いて、私の目頭が熱くなった。宗教の存在が国民から軽視され、又浄土宗の僧侶の中に、金光上人の御名を知れる者、まことに数少ないと思うのに、このいときなき小学生が、金光上人の御名を覚えて道を教えてくれたことは、七百余年の昔の、この偉大な念仏行者の感化力が、今もなお、三歳の童児にまで及ぼしていることに泣かされました。

暑さに喘ぎながら、上人の墓前に着きまして、西光院住職相龍導師並に母堂、総代の

県会議員小倉豊氏等六、七名の檀家の方々が、上人の御墓を清掃され、御供物を捧げ香華を運らねて、一行を御迎えしてくれました。

金光上人の御墓は立派な豪壮なものである。墓石は新旧大小合せて五基程ある。一人の上人に墓石が五基もあるのは、まことに奇異の感じを抱かせるが、これは後の世の、上人の徳を慕う篤信の人達の手に依って、何代かに亘って建立せられたものであることが知られた。

バスが梵珠の山の麓を通った時、南国生れの上人が、丈に近き積雪の中で伝道せられた御苦労が回顧されましたが、今この墓前に佇めば、その感が一層深くにしみ出て来ました。宗務長を導師として一行七十名、声高らかに「我建超世願」と誦経すれば、臉の中に、念仏弘通の大願を建てられ、文化に遠い本州の北端、幸薄き津軽の民を救済せんが為めに不惜身命、文字通り法難を乗り越え、病魔と闘いながら布教せられた上人の面影が、涙にまじって浮んで来ました。御苦労されたこと

有難き念仏の行者よ。今私達末流門弟が、あなたの墓前で誦経し、あなたの弘められ、唱えられた念仏を、あなたの法難と生活の困難を省みずに弘められた念仏を、何等の困難も窺ひも蒙らずに、今茲で唱えております。

宗務長を先頭に、交替で七十名が、香を焚き水を捧げ終ってから、柏住職、小倉総代さんを始め檀家の方々の前へ宗務長を御案内し御紹介申上げて、「宗務長さん、今茲に居られます方々の御先祖の時から七百有余年の長い間、代々こうして立派に御墓を御守りして来たのです。本山と云う御寺からも、宗務所からも一銭の補助を頂いて、こうして立派に莊厳に維持して来たものではありません」と申し上げました所、小林大藏宗務長の目から、止めどもなく涙が流れました。声をつまらせて、「私達は遠い所に居りまして、思はあれど手が届きませんでした。今日のこの日、金光上人の御墓に御参り出来て、こんなに嬉しいことはありません。皆様方の御先祖様から代々、かくも立派に御墓を御守りして頂いたことは、感謝に堪えません。皆様方の御辛勞と御信仰の深さを始めて知ることが出来まし

た。今後何卒よろしく御願ひ致します」と申されました。側で聞いていた私の胸も引き締められ、思わず涙が出て来るのを、どうすることも出来ませんでした。

あの豪放な宗務長が、この金光上人の御苦勞の念仏を思い浮べて、今日置かれている浄土宗の悲境を省みてのことでありましょう。

昭和三十六年三月一日から宗祖の七百五十年の御恩忌御法要がとまります、教学が頹廢し、僧風が乱れて布教が衰微し、宗祖や二祖、金光上人等の不惜身命の念仏弘通の為めの御努力を省みれば、涙が流れ出づることも無理のないことであります。

宗務長のこうした涙の挨拶を受けた、柏住職、小倉総代等檀家の方々も、目をぬぐっておられました。この西光院の檀家の方々の胸にも、七百有余年の昔からの数々が、新たなる思出となつて、宗務長の言葉に感激されためでありましょう。金光上人の御徳孤ならず、今にいたつても無言の教化をなしておられます。

この感激の挨拶がすんで、小倉豊氏から、金光上人の墓地の所在地の歴史的環境の説明

がありました。それに依れば、上人の墓地の
あるところは、昔南朝の忠臣、北畠家の居城
の附近であり、北畠家はこの金光上人の信奉
者であったと知らされました。北畠家は、天
正年間、津輕為信の爲めにその居城を奪れた
爲めに、姓を山崎と替えて浴川に逃れたとい
うことですが、その後裔である、弘前大学医
学部講師医学博士北畠栄太郎氏は、私の友人
であるが今は曹洞宗になっている。まことに
残念であります。

金光上人の東奥最初の念仏の道場であった
西光院は、鬱蒼たる森に包まれた、静かな鄙
びた農村に普通に見られる建物である。

慶長十四年八月八日（旧曆）、領主津輕氏
の寺院政策に依て、他の多数の寺院と共に弘
前城下に移された。これが現在、弘前市新寺
町にある西光寺で（住職工藤昌瑞師）、その
跡は庵として残され、寺宝は寺名と共に弘前
に持って行かれた。弘前市西光寺の御本尊は
金光上人が靈夢に依って、東津輕郡に流れて
いる阿弥陀川から引上げられたものと伝えら
れ、今は青森県における重要文化財の指定を
受けております。これが明治初年に、金光上

人の御遺徳を慕う人々に依て再建され、再び
寺号を公称して西光院となったのでありま
す。金光上人の墓地の莊嚴壮大なの比べて
、寺の建物の頽廢しているのは、以上の事情
に依る爲で、まことに止むを得ないことであ
ります。然乍ら、この御寺とても、やがては
金光上人の御墓を御守りして来た、篤信誠実
なる方々の手に依て立派に再建される日も遠
いことではないでしょう。

帰途には、宗務長を先頭に一行七十名が、
この金光上人を開山とする田舎寺に参詣し、
開山上人、歴代諸上人、檀信徒先亡への御回
向申上げ、未だ日の沈まざる五時頃官僚バス
に再び乗車した。この時には往路の不快感が
、念仏興隆の先達の事跡に感激した爲め、す
っかり無くなり、かえって敬虔な気持ちに心が
浄化されて、今日の日、この御墓に、詣
でることの出来たことで、心の中に喜びが一
杯になった。

青森市正覚寺の講習会場に、夕景六時頃着
きました。静かにこの金光上人墓地参拝を
振りかえって見ると、また感慨無量のものが
ありました。それは阿波之介の御墓のこと

あります。同じ様に法然上人の随従者で、念
仏行者であった阿波之介の御墓は、岩手県平
泉町中尊寺の光堂（金色堂）の側にあり、今
は見る影もありません。伝説に依れば、宗祖
の亡くなられた事を金光上人にお知らせする
爲めに、勢観房源智上人の使者として、都を
後に通る途に津輕に下向し、使命を果た
した後帰途に着き、漸く平泉なる中尊寺光堂
の前に辿り着かれた時、不幸疫病に倒れたと
云うことであります。昨年盛岡の講習会に受
講した時、前宗務長と共に行き、その
衰れさに、前宗務長と共に泣かされました。
御墓の前にある石の手洗鉢の裏に「文政七年
八月奥羽兩州浄土門中建之」とある文を私が
発見し、昔の浄土門の方々が、悪路を遙しとせ
ず、旅の不便をものともせず、この阿波之
介の遺徳を慕うて建石されたのに、今は僅か
に岩手教区の方々に依て漸く維持されていま
す。

昭和三十六年は宗祖の七百五十一年の御遠忌
である。薄徳の生きている者を表彰する前に
總本山も宗務所も共に一考して頂きたい。阿
波之介の御墓の再建と護持を望み、金光上人
の御墓へ参拝した感激を、更に新にして筆を
おきます。



素はだの人

—千葉胤頼—

鶴田湛泉

四

藤原秀衡の次男、泰衡は父の跡をついで出羽陸奥の押領使として六郡を管領して頗る有勢であった。

かねてから奥州追討の機をねらっていた頼朝は、文治五年、三軍を組織して鎌倉を進発することとなった。

北陸道は比企能員、宇佐美実政が将となり、本隊は頼朝自ら千の精兵を率いて征途に上り、八月十二日多賀の国府に到着した。

千葉常胤は、八田右衛門慰知家と共に、子息六人孫成胤、平次常秀等一族と共に、常陸下総両国の勇士を率いて東道道を岩城の岩崎を経て、阿武隈川を渡って本隊に合流した。

泰衡は頼朝の軍が進発したときと、俄かに五丈の堀を二重に掘って阿武隈川の流れを入れて柵とし、聚勇の声えある異母兄西木戸太郎国衡をして二万の兵を以って守らしめた。

これに向って頼朝は、全力をつくして攻めたて、遂に撃破してしまった。

頼みとしていた国衡が討死し、関東勢に本拠平泉に押しよせられると、泰衡は狼狽し、目覚しい防禦戦もなさず、藤原三代の榮華を語る金殿玉楼に火をかけ、北方の深山へと遂電してしまった。

頼朝は軍兵を分つて、彼の行方を捜したが、少しも分らない。尚も奥山を峻重に探査するよう命が發せられた。

身一つで危地を越れた泰衡は、比内郡贅柵の郎党河田次郎を頼ったが、あわれ彼のために誅せられてしまった。

一方、東六郎胤頼は、衣川の館を守っていた前の民部小輔基成父子の召し捕り方を命じられていた。

基成の娘は秀衡の妻であったので、泰衡の外祖父に当る彼は、京より来って泰衡の庇護をうけ、衣川の館に居住していたのであった。

ここは、かつての日、泰衡が数百騎を率いて俄かに襲い、義経が

弁慶と共に一族無念の討死を遂げたところである。

頼朝から基成追討の命を受けると、胤頼は彼等を生虜にしようとした。

かの一の谷の合戦では大手の大將範頼に従って、父常胤、小山朝政、畠山重忠、梶原景時等の名ある武將に伍して將となり、輝かしく武勲を現わしたほどの彼のことである。基成ごときは、易々に生け捕り出来ると思った。

思った通り、基成は一矢も射もしないで、劔をも抜かずに手を束ねて降人となって来た。

基成と彼の子息三人を生虜にした胤頼は、彼等を帶同して平泉の本陣に頼朝の御前に引き立て、大いに面目を施すことが出来たのであった。

五

常胤は、旗挙げの当初から誠意を捧げて頼朝によく仕へ、一族と共に、いづれの合戦にも、著しい戦勲をたてていた。とりわけ、武蔵の國に割拠していた江戸、秩父その他の諸豪族が、早く頼朝に帰郷するようになったのは、これらの豪族との間に立って、常胤が熱心に斡旋につとめたことによるものであった。

彼の忠節には、他の諸將も能く及ぶものがなかったので、頼朝も深く常胤を信頼し、軍機の巨細に渡って諮問せぬ時とはなかった。それ故、頼朝は、賞を功臣に行う時には、まさに常胤を以って首とすべしといっていたほどである。

常胤一家に対しては、頼朝の信頼厚いものがあつたが、とりわけ、徽を諸方に飛ばした往時、父を説いていち早く一族を率いて召に応ぜしめた胤頼に対しては、それを徳としてか一家中に於ても、頼朝の着遇しやうぐ特に篤いものがあつた。

寿永元年七月十二日、かねて懷妊していた頼朝夫人政子は、臨月に近づいたので、出産のため静かな比企谷殿へ渡ることとなった。政子の乗った輿を、近臣の千葉胤正、六郎胤頼、梶原景秀等が供をして守って行った。梶原景時は、御産の間の雑事一切を奉行すべきことが命ぜられた。

翌月十二日、政子は芽出度く男子を安産した。二代將軍となつた頼家である。頼朝のよろこびはいうまでもない。

若君誕生については、源氏代々の佳例にならつていろいろの儀式が連日催された。

十八日の生誕七夜の儀には、千葉一家挙つて奉仕することとなつた。

白の水冠冠を装うた常胤親子は、相揃うて御家人の上座に著してゐた。

常胤の妻は御前の陪膳をなし、各々それぞれの役についた。やがて進物の儀が行われると嫡男胤正、次男師常は用を昇ぎ、三男胤盛四男胤信は馬を引き、五男胤道は引箭を持ち、胤頼は劍奉持の役についた。

庭上に連り列んだ兄弟の揃つて容儀端正で天晴れな武者振りに頼朝は殊の外満足げに眺めていたが、式に列つてゐた御家人も、千

葉一家の勢望を現わすこの壮歎に、感嘆せぬものはなかったという。

建久元年十月三日、頼朝が晴れの上洛のため鎌倉を出発することとなり、具奉の先陣後陣の役を定められた。例によって畠山重忠が先陣を命じられたが、胤頼と常胤の嫡孫常秀を召して、後陣として最末に候すべきの旨の沙汰があった。先後陣は、衆の推服する者でなければならなかった。

後年のことであるが、実朝が功臣の家に命じて頼朝から賜った手書を提出せしめたことがあった。その時、諸將の献じたものは、皆二三通にすぎなかったが、千葉と小山とは、数十通の多数に上ったという。

六

法然上人の弟子に、西仙房心寂という念仏行者がいた。彼は、信空と同じく初め寂空の弟子であったが、後に上人を師とするに至った。学者である上、道心も深かったため、上人も大切に思い寵愛していられた。

西仙房は、こんなことを思うに至った。

「親しい法友や同行の多いところでは、色々な煩しいことが多いから、いっそ誰も知らないところへ行つて、静かに念仏申してみたい」

そう決心すると、適當なる場所がないものと諸方を捜し歩いた。丁度河内郡讃良（サララ）という所に、格好な土地が見つかった。

ので、尋ねて見ると、その持主は尾入道というこの辺の長者であることがわかった。稀な慈悲深い人で、いつも僧尼が寄寓しているときいて、意を強くしてかの家に訪ねて頼んでみた。

「静かな所にいて後生のつとめをいたし度と思いますが、身命をつなくべきよる辺とてありませんぬ。入道殿は慈悲者と承りますれば、あの林の中に方丈の庵を一つ作っていただいて、その中に籠って静かに念仏いたしとう存じます。心経一卷をもよませていただき、消息一紙なりとも御用を弁じたいと思いますれば、何にても食物を送り賜りませぬか、少しばかり露命をつなぐものを、山林の鳥獸に族すと思つて下され」

と無遠慮に願った。

一見して殊勝な修行者と思つた入道は、

「いかにも御房の仰せに従いましよう。ゆめゆめ心を違えてはなりませんぬ。懸命に修行なされよ」

ささやかな庵を作つて、彼に供養することを快諾したのであった。

よろこんだ西仙房は、

「その中に参りまする」

と約束して、一たん京へ帰つて来た。

お経を初め、僅かな所持品まですべて知人に分ち与えてしまふと、ただ水瓶だけを携えて上人の草庵を訪れて、隠栖の所存を物語つて、

「この世では、お目にかかるのは、只今ばかりと思ひます。再

会は極楽にて致しようございます」

炎のような求道心に燃えていた彼は、こう挨拶して氣負って立ち去って行った。

その後、弟子思いの上人は、

「身命をつなぐべき朝夕の営みはどうしているであろう。無事であらうか」

と秘かに案じげに、西仙房のことを弟守達と噂することもしばしばであった。

いつしか三年程経った或る日、吉水の庵を訪れた僧の後姿を眺めた上人は、

「はてな、あの御房は西仙房ではないか」

と不審に思った。

弟子に容子を見にやらずと、やはり西仙房だったので、直ぐ彼を招きよせて、

「どうして訪ねて来ましたのか」

上人は尋ねた。

彼は、氣まり悪そうにこう語った。

「そのことでございます、あちらへ隠遁いたしましたして初めの年ぐらひは、心もみだれることもなくよく行い済ましたが、この春あたりから、つれづれの心が出て来て、法友や親しかった者など恋しくなり、余りつれづれに堪えぬままに、あの時持っていたお経でも開いて見たならば慰めるよしもあるだろうにと、人に与えてしまったことさえ後悔せられ、その上果ては食事を知らせてくれる小

童などに向って、他愛ない戯言をいって心を慰めていましたが、いよいよ意屈の心が旺人になってしまいました。心を静めて念仏申



したいためにこそ、ここへ来ました、これでは予期していたこととは全く違つて、無益の住居と思われ、折角好意を持ってくれた入道殿にも辞りもいぬままに無断に逃げて参りました」

彼は、一たん人を避けたが、人懐きがこみあげて来たのであった。

人間ほど、他の人間を避けたがりながらも、人間をなつかしがるものはない。

彼も、人間の巷が急に恋しくなり、孤独に堪えなくなつたらしい。

彼は自分の心境を正直に告白するには、余程の勇氣が必要であつただろうが、何事も打明けて母の如くにきいて貰えると思つたのか、上人の前につつまかくさず語つた。

ほほえましくきいていられた上人は、彼の不覺を詰られなかった。それのみか、

「智者にも學者にもよらず、道心のない者には、かような心は起らない」

と、西仙房の卒直な言葉を貰つたえた。道心とは、菩提心のことである。向上を求める尊い宗教心のことである。これでいいだろうかと、反省する尊い向上心のことをいう。

日頃上人は、山林に独居して念仏申されなければ、町にいて多くの人々と同行するがいい、生活様式はいかなるものであれ、念仏申る生活がいいのであつて、生活様式に促はれては決していけないとせ教えていた。

七

其の後西仙房は、姉小路岐殿（ハライドノ）の辻子という処に妹の尼が住んでいた草庵の後に、廂をかけて自分の身一つ納まるだけの藁の囲いをして、僅かに身を横えるだけの内に籠つて、紙の衣を着、食時便利の外は一向に念仏していた。

小さな土器六つ並べて、香をもり、火を消さず、とり移しつつ念仏して、人にも対面せず全く別天地を劃していた。

念仏に明け、念仏に暮れ、彼の生活にあつては念仏が全てであつた。それは又、念仏の一声一声に満足し切つた恵まれた生活でもあつた。

彼の住居は、ほんの雨露をしのぐに足るだけのものであつたろうが、彼にとっては、王者の金殿玉楼にもまさるすみ家であつた。なぜなら、如来の大悲に浴する中に見出さるる法悦に浸つていたからである。念仏がすみ家であり、広大な如来の大悲が、彼のすみ家であつた。

彼にあつては、天地はすでに充たされていて、いささかの不安もなく、拘んでもつきぬよろこびがあふれている。人生に対する讚美と深い感謝があるだけである。

持てる物としては、何一つもなかったが、ほんとうに何物をも持たぬ者の幸福を味つていた。何物をも持たないが故に、既に全世界を持つ思ひである。念仏の中に生命の律動を感じ、生の深さを知つて悠久に生きる悦びで胸がおどる思ひであつたろう。

一見、彼は人生を捨てたかに見える。而しそこに、如來の大悲に浴する光明の生活があった。

上人の言葉にすれば「この世を肝要と思う者こそ、この世を捨つるなれ」である。

彼の生活は、深められ豊さがあり、滋味より滋味に入つて静かに人生を味う感激の生活であつた。

こうした簡素な無欲枯淡な生活を送っている彼の行状が、いつしか人々の噂にのぼり、これをきいて絶対無二の勝利者を見るような驚畏を感動を受けたのは、たまたま大番勤仕のため京にあつた千葉胤頼であつた。

西仙房の何の虚色も、見かけもなく、すべてを捨てきつた素裸の人間となつた神々しいまでの生活美に憧れて、胤頼は吉水に法然上人を訪れたのであつた。

幕府の御家人として頼朝の信託を受け、千葉一族として華々しい武士であつた胤頼も、西仙房の生活態度から念仏の尊さを知り、遂に出家して法河と名乗つて、上人に常隨給仕するに至つた。

その後、上人滅後十七年目、嘉祿三年六月山徒の暴挙によつて大谷にある上人の墓堂が破却せられた時、ここでは墳墓の安全が保ち難く思われ、御遺骸を堀り出し嵯峨へ移すため、千余人の遺弟信者等が守つて行つたが、この時胤頼も山徒の乱暴を防ぐため郎党を卒いて、せめてもの報恩と肅々と護衛して行つたのであつた。

(了)

お 願 い

本誌も、皆様の御協力により、紙面拡充、内容刷新をはかり、且つ新規御申し込みも続々と頂き、関係者一同、大いに感謝致しております。

ますます専念努力し、本誌の真価を發揚せしめ、皆様の御愛顧にむくゆる存念でございます。宗教雑誌の特殊性という事を考え、ずんずん進展させたい。こういった事が可能なのも全く会員各位の御力添によるものです。

つきましては本誌發行運営を円滑にする為維持会費及び一般会費を御清納の程をお願い申し上げます。

尚、前金切の御通知は御手もとにおとどきと存じます故、同封の振替用紙を御利用下さい。

東京都品川区大崎一の七八二

法 然 上 人 鑽 仰 会

振替 東京八二八七番

仏に笑われた母

編集部

八十を二つも越した高

過ぎないらしい。

齡だったし、食事もほとんど喉を通らないという知らせがあつて間もなく電報を受けとつたので、さてはと思うのは当り前であつた。列車に乗つて

何はともあれ、これが孝行の仕終いになるだろうと思えば私といえども神妙になる。すその方に廻つて母の腰に手をのぼした。永い病床にある母をさするつもりであつた。ところが母は、細い腕を振つて、一言「いらないよ」ときた。今になつても強情は直らぬらしい。

兄や妹とこうして集まることはほんとに久し振りであつた。甥や姪たちがいずれも親たちより大きくなつてしまつたのに驚いてしまつた。しかし話している内に、すぐ馬鹿もいえる心安さになつてしまつた。これは肉身の懐しさというよりは、自分たちの生家集つたというためであつた。柱一つにしても、みな子供の時分のいたずらの跡を残さないものはない。私たちは「母キトク」の電報で馳せ参じたのに、ジメジメした暗さがどこにもなかった。さすが大声を出すものはなかったが話の中には笑い声さえ混入のであつた。臨終に間に合いたいという気持だけで、駅の改札口を走り抜けるようにしてきてみれば、母が案外元氣な顔をしていた、というホツとした気分になつたためであらう。

から、あれこれと母の面かけが去来するので一睡もできなかった。

玄関から病室にまっすぐ入つてみると、母がジロリ私を眺めてニヤリと笑つた。私はそれまで氣持を張りつめていただけ、夢でもみていたような錯覚を感じ、そのすぐ後で、母に甘える氣持になつた。

「どうなんですか」といえば

「よくきてくれたね。お前も元氣そうで結構です」

と声も案外しつかりしていた。これではどちらが見舞か判らない。学生時代から、よく母が氣を蒙っていた私の頭もすっかり禿げあがり、そのおかげというのも妙だが、どうやら大学教授文学博士の肩書を持つようになつたものの、母の前では相も変らぬ臍白小僧に

落つかない一日が終つて、夕食がすむと、母が私を呼んでいるという。兄や妹も私と一緒に病室に入ると、兄と妹は外に出ているという。私にだけ特に話がしたいらしい。私もつきり遺言でもあるかと思つて、母の顔近くに耳をもつていった。すると母は開口一番「そんなになくても話はできるよ」

といった。全く憎らしい年寄りである。ところが、それから綿々と続いた母の小言が大変だつた。母の目からみれば、私も今もつていたずら者にしか見えないらしい。母の言葉によれば、私は「かんしゃく持ちで、何をするか判らない短氣者」であるし、「けん嘩をしては相手に怪我をさせる乱暴もの」だつた。私が門に火を放つたことがあり大騒ぎを引きお

こしたことに至っては、私の記憶に全くなかっただけに驚いた。こんな話が二時間続いた。正座させられたのには、ねをあげてしまった。

小言を終ると次は訓戒である。例えば、

「辛抱しろよ、辛抱しろよ、やがて辛抱に花が咲く」

と浪花節口調なのである。これを母がいうと一句一句私が復誦する。若し私が「やがて」を抜かしていると、やり直しをさせられる。

やつのことで私が放免となると、お次ぎは妹の番であった。病室に入る妹の後姿をみながら思わず苦笑してしまった。

私が馳けつけてから三日目の十六日に、母は永い生涯を終った。食事をとらず死ぬ前まで子供のことを心配していた母が亡くなるとやっぱり寂しい。話も自然と母の思い出におちて行った。段々と話を聞いてみると、親せきに電報を打った頃には、勝気な母にもおかしい話があったらしい。

信仰実話

ある朝のこと兄が病室に入って

ゆくと、母はニヤニヤ笑っていたが、いきなり「アミダさまに笑われてしまったヨ」と前置きして、こんな話をしたそうである。

母がブト目を覚めた時は、家中が寝静っていて、二燭の電燈が妙に暗く思えた。何気なく顔を床の間の方に向けてみると、壁にボンヤリ立っている者がいた。誰かしらとよくみると、それはアミダさまだった。アミダさまはにんまり笑って、母に質ねた。

「どうだ、足が冷たくなったであろう」

母はびっくりして

「いゝえ、足は冷たくなりません。それはどういうことですか」

「さようか。それでは近く足が冷たくなるはずである。わたしがお前を迎えにくるのは十六日だから、そのつもりでいるように……」母はアミダさまに何か申上げなくてはと、焦ら焦らしたが、一つも言葉にならなかった。そのうちアミダさまは消えてしまった。

兄はまさかと思つて母の遅く日を予言しなかったが、余りに不思議なもので、私に説明してくれな。

これもやはり母に関することで、近所の人

が弔問にきた時の話である。

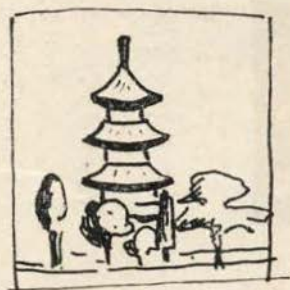
この人は農家の主人で、年寄りといつてもまだ六十位で、何をやらせても便利に手伝ってくれていた。この人がある晩のこと用事があつて、夜道を急いでいると、向うから母が歩いてきた。すれちがう時に、その人は

「お婆さん、もうよろしいのですか、どちらにゆかれます」
と質ねると、母は、

「少しもよくならないので困ったもので一寸お地藏さままで……」

といつて、立停ることもなく行つてしまった。私たちもよく知っているが、家から一町位離れた岡の上に、昔からの地藏堂があつて石のお地藏さまが祀られていた。

その人は、別に気にしなかったが、今となれば、母が外に出るわけもなし、夜道に明りのないのに、遅くから母が歩いてきたと一目でわかつたのもおかしいと思ひがつていた。そして私たちは、母が若い頃からお地藏さまをよく詣り、地藏堂の掃除をして子供たちの育成を祈っていたことをよく知っていた。だからその人の話を聞いているうちに私たちの身体が自ずと引きしまるのを憶えた。



法然上人の言葉

— 第五回 —

増 谷 文 雄

「まことにこの身には、道心のなき事と、やまひばかりや、なげきにて候らん」

【要義問答】

「要義問答」は、問答体をもって、選択本願念仏のおしえについて、その要目を解説したものであって、その行文は、かの上人の文章の特徴をよく現わしている。しかも、読みいたれば、この私が、かの上人まゝに對坐して、問いかつ教えられるような感銘すらもわいてくるのである。

その「要義問答」の冒頭の言葉が、ここにとりあげた一句である。その一句が、たちまちにして、この私をして、かの上人のまゝに對坐して坐する感銘をかきたててくれ

る。その故は何であろうかと考えてみると、ここには、珍らしく、かの上人が自分自身をうち出して語っているからである。

すでに書いたことであるが、法然の文章はあまりに整いすぎていて、かえって、よそよそしさが感ぜられる。たとえば、「登山状」の書き出しは、つぎのような名文をもつてはじめられている。

「それ流浪三界のうち、いづれの界かにをもむきてか、釈尊の出世にあはざりし。輪廻四生のあひだ、いづれの生をうけてか、如来の説法をかざりし。華嚴開講のむしろにもまじはらず。般若演説の座にもつらならず。鷲峯

説法にはにもぞまず。鶴林涅槃のみぎりにもいたらず。われ舎衛の三億の家にややとりけん。しらず地獄八熱のそこにやすみけん。はづべし、はづべし。かなしむべし、かなしむべし。」

それは、まことに整然たる名文である。だが、あまりに整然たる名文であるがゆえに。かえって、よそよそしい。たとえ、そこには「はづべし、はづべし。かなしむべし、かなしむべし」と、末代衆生のなげきが語られているとしても、それは、整然たる名文のゆえに、かえって、肌ふれ、血肉を通しての感銘として、私どもの内なるものに迫って来ないものとなる。

そのうえ、法然は、あまりにも学者であつた。その頭脳のなかには、年ごろ学びきたつたところの智慧や体系や聖語が充満していた。したがって、彼が、選択本願念仏のおしえを語るときには、やはり、それらの智慧がさきに立ち聖語があとからあとからと、湧くように出てくる。よく知られているように、「歎異抄」のつたえる親鸞の言葉は、関東からわざわざ上洛してきた同行たちをまえにして、

「念仏よりほかに往生のみちをも存知し、また法文学をもしりたるらんと、こころにくくおぼしめしおはしましはんべらんは、おほきなるあやまりなり。もししから

ば、南都北嶺にも、ゆゆしき^{そと}学生たち、おほく座^ざせられてさふらふなれば、かのひとびとにもあひたてまつりて往生の要よくよくきかるべきなり。」

と言いつ放っている。そういう言い方は、この法然には、とうてい、あり得ないものである。いや、法然もまた、しばしば、念仏はただ申すよりほかには風情もないのだと、繰返して語っている。智慧の証明はありえないのであり、知識のうしろだては不要であるのが、この念仏のおしえの立前である。

「本願の念仏には、ひとりだてをせさせて、すけをささぬなり。すけといふは、智慧をもすけにさし、持戒をもすけにさし、道心をもすけにさし、慈悲をもすけにさすなり。」

という「つねに仰られるける御詞」のなかの一句も、その意味であると考えられる。「すけ」とは、助太刀の助である。なにか助太刀がなければ、往生ができないような念仏ではないというのが、「本願の念仏には、ひとりだてさせて、すけをささぬなり」という、平たい言葉で表現せられているのである。だが、あまりに学者であつた法然の言葉は、やはり、ともすれば智慧がでしゃばり、ややもすれば聖語が助太刀をしていることを、いかんともすること

ができない。

そうした法然の言葉の反面は、かの上人の血肉の自分自身が、めったに、打ち出されていないということである。

すばらしい文章である。豊富な内容である。すごい頭脳であると思う。だが、それらの文章や内容のかげにかくれて法然その人の生きた人間の印象は、たいてい稀薄なものになっている。それが、法然の文章に接するときの、私どもの、いつもの物足らなさではないであろうか。

しかるに、いま、この「要義問答」においては、いきなり、その冒頭において、自分自身をなげ出して語っている。それが、私には、何ものにも代えがたい、有りがたい言葉として受けとられるのである。——この身のなげきは、第一には、道心のないこと、第二には、病ばかりのうつつ身であること。それがわたしの歎きであると、あの上人が、ふと語りいでている。それが、私にとっては、何よりも、この身にしみて感銘せられるのである。このような感じかたは、いったい、私だけのものではあるうか。

それにつけても思いたすのは、かの仏陀が久方ぶりに、故郷のシャカ族を訪れた時のことを記した經典の一節である。わが種族のはこりである仏陀をむかえるというので、シャカ族の人々は、たいへんな喜びようであつたらしい。

ちょうど新しい会堂ができたところで、その会堂びらきには、仏陀をむかえて、第一步を踏みいれていただこうということであつた。仏陀は、よるこんで、その会堂びらきのぞんだ。そして、その夜はおそくまで、その会堂で説法をした。だが、旅のつかれが出たのであろうか。背中がいたくなってきた。

「われ背痛む。アーナンダ（阿難）よ、われに代りて、人々のために法を説け。」

そう言つて、仏陀は、しりぞいて横になった。その經典の一節のなかで、私には、「われ背痛む」という一句が、心にくいいるように感銘がふかい。それは、私には、悲しい一句である。かの師もまた身体のよわい方であつたかしらと思うと、私の心は悲しむ。だが、その悲しみとともに、私の心は、ふしぎな喜びをも感じる。それは、かの師の人間性に、じかに触れ得たことからくる喜びである。かの師もまた、私どもとおなじように、疲れも病いもまぬれない人間であられたのだ。そう思うと、いままでは、私どもから遠くはなれた存在であると思つていた仏陀が、急に高いところから下りてきて、すぐそばに立っていられるようにすら感じる。ふと手をさしのばせば、仏陀の人間性の肌にすら、触れることができるようにさえ思われる。その

ゆえに、私には、「われ背痛む」というこの言葉が、うれしくてたまらないのである。そのような感情は、いったい私だけのものではあるか。

そうではない筈だと、私は思う。何となれば、宗教とは単なる理論や知慧の体系ではない筈だからである。人間と人間との触れ合いがなくては、宗教はなりたち得ない筈だからである。ところが、智慧と実践のたかい人格である仏陀に、おなじく智慧や実践をもってふれ合うことは、むしろ、容易なことではない。だが、「われ背痛む」といって横になられた仏陀には、私もまた容易に、心あい触れ合うことができるのである。その触れ合いを通して、仏陀もまたまさしく現身の人であつたかと思う。その思いを通してともかくも、仏陀に結ばれてゆくことができるというのは仏教徒である私にとって、せめてもの喜びであつてよい筈である。

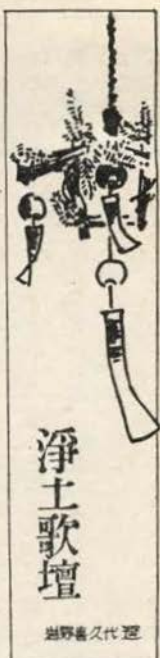
ましてや、法然は、凡夫救済の道を説いた方であつた。悪人正機のおしえを説いた方であられた。そこでは、絶対憑依の感情がその支柱として存するのでなければ、この道はとうてい成りえないのである。もっと具体的にいえば、偏依法然の立前が確立せずしては、法然のおしえは成り立たない。偏依親鸞の感情が模倣するまでは、親鸞のおしえが本当にわかつたとは言えないのである。そして、その

ような絶対憑依の感情は、人間と人間とのじかの触れ合いを通さずしては、到底、ふつふつとして湧き出てくる筈はないのである。

そのような人間の触れ合いは、親鸞の場合には、容易に実現することを得るであらう。何となれば、親鸞は、いつでも、まっ裸になつて、自己をうち出している。こちらもまた赤裸々に人間性をうち出して、心の手をさしのべさえすれば、いつでも、親鸞の人間性にふれることができる。それが親鸞の言葉の特徴なのである。

だが、法然の場合はそうはいかない。この上人は、智慧の彼方におられる。学問のかげにかくれている。それが法然の文書や言葉の特質である。そのうえ、伝記の筆者は、ひたすら、この上人を聖者の高い坐におしあげて、私どもから遠ざけている。この上人においては、人間の触れ合いを感じとることは、けつして、容易ではない。だが、この一句においては、法然は、さつと自分をうち出しておられる。わたしは道心がないことが悲しい、と言っている。わたしは病氣ばかりしている現身である、と歎いている。その言葉は、法然の人間にふれたいとねがう私どもの願いを、心ゆくばかり満してくれるのである。そのゆえに、この言葉が、いかなる智慧の言葉よりも、ありがたいものに思われるのである。

(東京外国語大学教授)



浄土歌壇

明治三十八年

天

東京 平川 梅路

庭すみの香具山ならぬ竹竿に白妙の衣ひるがへるころ

爽やかな夏の風物です。作者は干物をしながら持統天皇の有名な「春すぎて夏来にけらし」を思い出し、よい気持になったのでしよう。但し香具山ならぬ庭隅の竹竿だが白妙の衣のひるがえるのはすがすがしいものだと、楽しんであります。ユーモアがあって面白い歌です。

地

鹿児島 長崎 恒子

春の雲うごくともなく船ひとつしーソーのごとゆれつつ進む

空は晴れて雲も動かぬ春日和なの、どうして海はこんなにウネリが高いのでしょうか。沖には小舟の姿もなく、この船のみがしーソーのようにゆれ進んでいるのですよ。

人

大阪 山村 綾子

ぬば玉の夜目に白々盛り上るあちさるを揺るはつ夏の風

ぬば玉と云う古風な用語がここでは利いています。華麗なあちさるの花、その背景の暗闇、そしてゆれうごく花のみ白く浮き出す初夏の夜の風、何か舞台を見てゐるような感じですよ。

北海道 土井多紀子

一生は長からぬもの美しき想ひ出をのみに置かん

大阪 菅沼宗四郎

谷へだて金剛山は雲にのりゆらりゆらりと動けるごとし

神奈川 松原 昌治

老といふ司の手引きいまずて世の片隅の隅に退く

静岡 小野 徳司

極楽によき一人生まるべし名残り惜しくもいと思ふこと

島根 渡辺 綾子

安らかに寝てわがままの許さるころこの世にこのみ寺のみ

東京 二宮 綾子

かく生きてあること死につつあることもよしやと海の波鼓うつ

熊本 宮元 尚

妹と背の御門あふぎて阿蘇山の波野ケ原にうぐひすの啼く

石川 神徳 凱一

空港をとび立ちし機赤き灯の明滅やがて見えなくなりゆく

福岡 阿部 千ヨ

俗の世の御国のためと旗をふり親をも子をも送りし日あり

神奈川 熊坂 満

緒く染めターバンのやうに巻きつけし髪女のたけきまなざし

兵庫 野口かずゑ

棘もてる花と知りつつ持かへり野ばらに今の幸を告ぐ

青森 向井 きつ

田の中の家に便し帰る道丸太にかけ見るおぼる月

東京 川辺つぎ子

血液を分けてやりたくそを云ひに深夜にひとり長廊下ゆく

鹿児島 串岡 君江

生魚の生皮はぎし感觸の手にのこりゐて孤独なる夕

東京 葛岡 利子

五ヶ月の子は手にもちてリンゴをば口に運びぬ朝風の部屋

鹿児島 児島登喜子

夫想ふ心に燃えてはるばると筑紫の果に添ひて来ませり

富山 八島 美雄

ゆく春を惜しみて見るは能登の海千鳥海原帆かげの白し

富山 匠 久枝

やや暗き樹立の蔭や気品ある老人のごと五輪塔たつ

神奈川 中里 文子

おん父の御居間ときけばなつかしや白雲軒の竹に降る雨

奈良 大口 善信

地下鉄がもぐらの如く大阪の地下掘りすすむ大和川指し

東京 星野 千代

行きづりに顔はこころばせ我れ呼ぶは煙突掃除の少年なりし

東京 麻見 和世

くぐり戸をあけ放ちたるあひだより白き紙見ゆ若き人らし

東京 柴藤よね子

すずしげに灯ともす如しえにしたの花に見入れば夕蛙啼く

東京 山田 清子

そよ風が影のみどりを踏らせて楽園とする初夏の陽の下

維持會員

熊本	山口	宮城	愛媛	京都	広島	東京	京都	群馬	東京	愛知	福井	奈良	神奈川	三重	和歌山	茨城	福岡
三宅	朱山	桶口	永井	千々和	武田	野村	藤原	水上	久保田	能登	大門	安井	大野	静永	秋田	石塚	江藤
春光	順哲	隆昇	立教	宝天	了範	宗春	弘道	堯俊	量速	芳隆	俊我	就道	法道	秀雄	貫融	寿仙	激英様

京都	熊本	富山	京都	群馬	愛知	山梨	東京	茨城	静岡	長崎	大阪	新会員紹介			三重	京都
石橋	上田	関野	日野	水上	村瀬	尊体	間川	喜藤	堀田	本原	松寿	慶雲	熊崎	山口	八羽	村田
誠道様	貞雄	善賢	徳宝	堯海	亮音	寺	光演	玄徹	良謙	義岳	智鑑	寺様	長之助	庄蔵	三郎	定五郎
																野口
																兆平

三重	新潟	佐賀	京都	佐賀	三重	大阪	三重	長野	青森	神奈川	北海道	埼玉	三重	滋賀
三好	川端	西岡	惠美	今泉	薬師	正覚	上里	有永	高橋	心光	斎藤	広野	鳥井	朝能
吉蔵	大祐	千代子	良子	登尾女	寺	寺	秀随	圭二	松海	寺	フミ	了義	信雄	菊香
														祐宝
														寺

(右六名浄土寺様紹介)
(西福寺様紹介)

「浄土」購読規定

一部 定価 金四十円

(送料 四円)

会費一力年

金四八〇円

(送料不要)

浄土 九月号

昭和十年五月廿日
第三種郵便物認可

昭和三十三年八月廿五日 印刷

昭和三十三年九月一日 発行

定価 四十円

編集人 竹中 信常

発行人 佐藤 密雄

印刷人 神谷 秀雄

印刷所 神谷印刷株式会社

発行所 法然上人讃仰会

東京都品川区上大崎一ノ七八二
振替東京八二八七番

◇◇信仰の歩みを進めるために◇◇

新刊 浄土トラクト

大正大学教授 佐藤賢順著

信仰へのみちびき

B六版・十六頁
定価十五円・十八頁

目次

1. 大慈悲の仏教
2. 知性を超えて
3. 美的情感を超えて
7. すべてを包む愛
6. 人生は信ずる心から
5. お導びきのままに

大正大学教授 竹中信常著

仏教入門

B六版・三十一頁
定価二十円・二十八頁

目次

1. 馬に水を飲ませるもの
2. 流れゆくもの
3. なやみとまよいのもと
4. すでに救われている
5. 信ずるところ
6. 仏を思う
7. 新しい生活
8. 美わしき世界の建設

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人讃仰会

振替 東京八二一八七番

最新刊

童話学入門

B 6 360頁 価 480円 50円

日本童話協会理事長
駒沢大学文学部講師
東京高等保育学校長

内山憲尚著

- 童話学は童話の基礎である。童話を話す人、童話を作る人、子供に話す人、幼稚園、保育所の先生、小学校教諭、日校こども会の指導者、児童教化に携わる人の知っていなければならない基本的なものです。
- 内山憲尚氏は30年来、童話学の大切なことを叫んで来られ、各大学や講習会等で講演されたり、研究された資料を整理してこの“童話学入門”を出版されました。

新宿区西大久保1-400

発行所 東京文化研究部出版部
取次所 日本童話協会